

---

# 緋弾のアリア 白の武偵

IS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋弾のアリア 白の武偵

### 【Nコード】

N9338R

### 【作者名】

IS

### 【あらすじ】

最強の力を持つ『はるかゆくえ遥行方』。人生をつまらないと感じる彼の、とにかく面白ければ良い行動方針。話は原作沿いで進めていきます。楽しんでもらえれば幸いです。

## 設定

主人公

「はるかゆくえ遥行方」

容姿はちよつと優しくなつたアクセラレータ  
髪は白のメッシュが入つた黒。目は紅

武装

H & K    U S P (オリジナルカスタム済み) ・ 4 0 S & W    v e r  
H & K    P S G - 1 (オリジナルカスタム済み)  
アサルトナイフ (マクロスFのVF - 25が使うナイフの縮小版)  
仕込みブレード (前腕部に装備する隠し武器。出したイメージはハ  
ガレンのエドが使う手の甲を錬金させたブレード?の感じ。両腕に  
装備)

「強襲科」に所属

Sランク武偵

通常の身体スペックは、ヒステリアモードのキンジと引き分けに出  
来るほど。頭の回転の速さはヒステリアモードのキンジを上回る

能力

「ベクトル操作」

発動時は髪の色が白に変化する

通常の超能力者<sup>ステルス</sup>と違い、精神力ではなく演算によつて能力を成り立  
たせているので、行方の場合能力の制限時間は無い。

性格は本家に近い。でもやさしさは普通にある。  
能力が発動すると、荒っぽい性格になる。  
ライフルであるPSG-1を持っているのは、狙撃も出来るから。

設定（後書き）

どうぞでしょうか？

何かありましたら、感想でよろしくお願いしますm m  
「 「 m

## プロローグ

人生つてつまらねエと思わねエか？

少なくとも俺はそう思う。

だからこそ此処 武偵高 に入學したし、なにか面白いことがあると思つてた。

でもまア、それは幻想だつたつてことだ。

まだ一年しか過ごしてないがつまらなかつた。残り二年もどうなることやら。

あア、だから何か面白いことが起こらねエかなア。

…そんな都合の良いこと無エつて分かつてンのによオ、そう考えちまう。

本当に何でも良い。大きい事件に巻き込まれるでも良いし、暴れられる状況になるでも良い。どんなことでも面白けりゃア良い。

だからよオ、少なくとも俺、はるかゆくえ 遙行方は

何かトラブルを望んでる。

とにかく何か波乱の学園生活を送りたい

だから俺ア、それを待つことにしたわけだ。特にやりたいこともないからな…

## プロローグ（後書き）

これから、よろしくお願ひします。m ( ) ( ) m

## プロローグ2

…ピン、ポーン……

慎ましいチャイムの音で目が覚めた。

コレは……

時間を確認すると 朝の7時。

(ハア、こんな朝っぱらから来るヤツ一人しかいねエ)

しかも俺ではなく、隣のベッドで寝ている男 遠山キンジのためだ。

俺は寝巻き代わりにジャージのままベッドから起き上がるとキンジのベッドの元に近づく。

「さアて、キンジくウウン。…朝だゼエ!！」

そして、キンジの腹に上げた足を振り下ろす。

「グボアッ!! ガフツ…テメ、行方っ…何しやがるっ!」

「ハッ、なんだよ。お前の幼なじみが来てンぞ? 起こしてやったんだから感謝しやがれエ」

「ゴホッ、ゴホッ…だとしても、もうちょっと穏便に済ます方法くらゐあるだろうが!」



「…星伽、悪いな。アイツ今起きたから上がって待っていてくれ」

「聞いてねえし！」

女子を男子寮の廊下で待たせて置くのもアレだったから、キンジがうずくまって喚いてる間に俺は客の迎えに出た。後ろで騒いでる馬鹿キンジがいるが気にしねえ。

「ったく、行方。よくもやってくれたな…まだイテエぞ」

寝室から着替えて さっきはトランクスだけだった 出てきたキンジ。すぐにコイツの幼なじみ星伽白雪ほしあいらゆゆの顔がパアッと明るくなった。

星伽白雪。外見は名前からわかるとオリ雪肌で、つやのある黒髪は前髪ぱつツン。目つきは優しげで、まつげも長い…まア、大和撫子を地でいってると言やア分かりやすいな。

「キンちゃん！」

「その呼び方、やめろって言ったろ」

「あつ…ごっつ、ごめんね。でも私…キンちゃんのこと考えてたから、キンちゃんを見たらつい、あつ、私またキンちゃんって…ごめんね、ごめんねキンちゃん、あつ」

星伽はあわあわと両手で口を隠して、蒼白になる…ハア、相変わらず愉快なヤツだ。

まア、ここまで見れば分かると思うが星伽はキンジに好意を寄せ

ている。

もっとも、キンジは気づいてねエがな。

「さアてとオ、俺はもう一眠りするから、邪魔すんじゃねエぞ」

「はいはい、わかったよ」

ちなみに星伽はいまだにあわあわしてた。

二度寝した俺が目を覚ましたのは7時50分だった。

(チツ、少し寝すぎたか)

着替えと帯刀帯銃を五分で済ませリビングに出ると、キンジがいまだに居た

「オイ、キンジィ。もオ五十五分だぞ？ どうすんだア？」

慌てたような返事がキンジから返ってくる。

まア、58分のバスにはもう乗れないか。

生涯。

生涯、俺はこの7時58分のバスに乗り遅れたことを幸運に思う

だろう。

なぜならこのあと、面白いイベントの幕開けだったんだからなア。  
神崎・H・アリアとその周りで起こるトラブルのなア。

## プロローグ2（後書き）

またプロローグでスミマセン。

次回から、本編突入です！

感想、アドバイス等待着ってますm（  
）（  
）m

1 弾 - f i r s t (前書き)

では、本編に突入します！

## 1弾 - first

俺とキンジは新学期早々、チャリで通学することになった。

武偵高については            まア省く。Wikiでも原作でも読んで知ってくれ

「なんだア？　いまの電波は」

「どうした、行方」

「いや、なんでもねエ」

武偵については、簡単に説明すつと『武偵法の定めた範囲内ならば、金さえもらえばなんでもする便利屋』つー認識で間違つてねエ。つーか簡単に説明するとそこに落ち着く。

それと、武偵免許    国際資格なんだが、コレを持ってると武装が許可され、逮捕権も得ることができる。まア金で動く警察ってトコだ。

∴ 武偵高に到着した俺とキンジは、体育館に向けてチャリをターンさせて

「そのチャリには爆弾が仕掛けてありやがります」

合成音声。ああ確か、ネットでよく耳にするボーカロイドだ。

その発信源を探ってあたりを見ると、俺とキンジにそれぞれ一つずつ奇妙な二輪車　　確かセグウェイ…だったかア？　　がチャリと併走している…おオ、いいねエ、面白そうないベントの始まりってかア？

「チャリを　降りやがったり　減速　させやがると　爆発　しやがります」

チャリのサドル下に手をやって調べてみると、四角い長方形の物体　　ンーっと、C4（プラスチック爆弾）ってところかア？　　このデカさじゃ、チャリより車でも乗ってるヤツごと吹き飛ばす威力つてトコか。

「助けを　求めては　いけません。　ケータイを　使用した場合も　爆発　しやがります」

併走してきているセグウェイをもう一度見る。

無人で、人が搭乗する場所にはさつきからボーカロイドの声を聞いているスピーカーと、一基の自動銃座。そしてこちらを向く銃口。そこに乗っかってる銃はUZI。<sup>ウージー</sup>

秒間10発の9ミリパラベラム弾をブツ放してくれやがる、イスラエルIMI社製の傑作サブマシンガン。

それがただただ併走してきてる

「チャリジャックってところかア？　　…珍しくって、面白そうじゃねエか」

「ちよつ、そんなこと言っていないでこの状況をどう切り抜けるか考えろ！」

「ン？ いや、俺は今すぐにでもどうにでも出来るが？ 伊達にSランクなンざもらってねェし」

「なら早く何とかしてくれ！」

「ヤダ。こんな面白そうなイベント逃すわけねェだろオが」

「命かかってるんだぞ!？」

「ああ、言い忘れてた。俺、自分は何とか出来てもオマエは無理」

いや、本当は出来るけどよ。

「期待させるな！ どうすれば良いんだよ!！」

「とりあえずソコに入れ」

キンジに差したのは第2グラウンドの入り口。

あいも変わらずUZIの銃口を向けてきている2台のセグウェイに併走されながら、そこに向かってチャリの全速力で走りこむ。

(今思い出したんだけどよオ、コレって『武偵殺し』の模倣犯…いや、オリジナルかもしれないねェなア。捕まっちゃって言われてたが、信用できねェし…)

隣でチャリをこいでるキンジはどうやって脱出するか考えてるよオだが、無理だな。チャリは飛び降りれば済む。まあ、そのためにこのグラウンドに来たんだが、下りたら9パラの雨だ。武偵法にやア』第9条 その武偵活動中に人を殺してはならない』があるン



だけだよオ。犯罪者にそんなモン通用しねエから、問答無用で防弾制服じゃねエ頭を狙われて、脳天に穴開けられて終了　　ってことだ。

「　　？（オイオイオイオイ、さらに面白そうじゃねエか。空から落ちてくる女の子ってかア？）」

ふと視線を上げた俺の視界に入ったのは  
近くにある7階建ての女子寮。その屋上のふちに足をかける女の子。

武偵高のえんじ色をしたセーラー服。  
遠目からでも分かる長いツインテ。

ソイツはそこから　　ふちを蹴って飛び降りた。

（おうおうおう。余計に面白くなってきたじゃねエか）

そのままその女の行動を目で追う。

虚空に身を躍らせたソイツは  
バツ、と。

事前に屋上に用意しておいたらしいパラグライダーを広げて飛んだ。

へエ。とちつとは感心した声を出すと、ソイツはそのまま長いツインテをなびかせてこっちに向かって来た。

「バツ、バカ！　来るな！　この自転車には爆弾が　　」

隣で喚いてるバカが一人居るが、気にしない。

こんな馬鹿まがいなことをやってくるヤツだ。事前情報無しで動くとは思えねエ。

空を飛んでいるソイツは、体を揺らしてほぼ直角にこちらに向けて方向転換すると、左右のふとももに付けたホルスターから、黒と銀の大型拳銃を2丁抜いた。

(コルトガバメント…か)

ソんでもって

「ほらそのバカ二人！ さっさと頭を下げなさいよ！」

ババババツ！

こつちが言われた内容を実行する前に、問答無用で銃撃を開始してくれやがった。

言われた内容がムカついたから、俺は頭を下げずにチャリのハンドルをキンジのいる方向と反対に切った。

拳銃の平均交戦距離は7メートル。ソイツとセグウェイの距離はその倍以上。しかも不安定なパラグライダーに加え、二丁拳銃の水撃ち。

その条件下でも、ソイツは当てた。

即座に、銃座とセグウェイの車輪はバラバラにブツ壊される。

過剰評価する気は無エが うまいな。

二丁拳銃を回して(オイ、無駄なこととしてンじゃねエ)ホルスターに収めると、そのままキンジの頭上に飛ンでった。

キンジはその少女から逃げるように第2グラウンドへ入って、それ追うように俺もグラウンドに入る。

「く、来るなって言っただろ！ この自転車には爆弾が仕掛けられてる！ 減速すると爆発するんだ！ お、お前も巻き込まれるぞ

「！」

カカカツ、キンジの野郎全く面白いように慌ててんなア。  
ン？ キンジの真上を陣取って

「 バカっ！」

ゲシッ！

キンジはその白いスニーカーで脳天を踏みつけられた…ウケるw

「それとそこのもう一人！」

あ？ 俺の事か？

「なんで指示通りにしないのよ！ 予定がずれちゃったじゃない！」

「ハッ、テメエの予定なんかにつき合ってる暇はねエよ！」

まったく、うるさい女だ。

「もう…まあ良いわ。武偵憲章1条にもあるでしょ！ 『仲間を信じ、仲間を助けよ』 いくわよ！ 一人目！」

ソイツがパラグライダーで気流を捕えてもう一度上昇 一人目？ ってことは俺にも何かする気か？ 借りは作りたくねエんだよ。

っーか、『いくわよ！』って何するつもりなんだア？

見ていると、グラウンドの対角線に行ったアイツはそこでシタ

ーンしてキンジの方を向く。

そして　ぶらっと、手で持っていたブレークコードのハンドルにつま先を突っ込んで、逆さ吊りになった。

そのまま、スピードに乗ってキンジに突っ込む。つまりキンジもアイツに向かって走ることになる。

「ほらバカっ！　全力でこぐっ！」

キンジに大声で命令した少女は、手を十字架のように広げた。ど  
オやらキンジを空へさらうつもりだ。

二人の距離はどんどん縮まって

そっついやア、昨日キンジが見てたアニメ映画にこんなシーンがあ  
った。

……男女が逆だがな。

そしてそのまま、キンジは空へとさらわれる。

だが、キンジのチャリは二人のパラグライダーとあまり離れてい  
ない。

つまり、爆弾の影響を多大に受ける　ちっ、仕方ねエ

「つめが……甘エンだよオ！！！」

自分のチャリから飛び降りると同時、俺の“能力を一瞬だけ使用  
してキンジのチャリの方へ俺のチャリを蹴り飛ばす。  
チカラ

普通に蹴り飛ばされたとは思えない　まア、普通に蹴ってない  
が　吹き飛び方で、キンジのチャリを巻き込んで二人のパラグラ  
イダーから遠ざかる。

そして

ドガアアアアアンツツッ！

閃光と轟音、続けて爆風。

俺とキンジのチャリが、グラウンドのほぼ中央で木っ端微塵に爆発した。

俺への爆弾の影響は髪がなびいた程度だ。

（やっぱホンモンか。あいつらは残念ながら爆風で吹き飛ばされたみたいだしよ…っか、新しいチャリ買わねエとなア）

そんなことを考えながら、俺は一人が突っ込んでいったグラウンドの片隅にある体育倉庫に向かってツカツカと歩いていった。

1弾 - f i r s t (後書き)

能力等も喋り方で分かるとは思いますが。

作者はあの方が好きです！(LIKEの方ですよ)

それでは読者の皆さん、次回もよろしくお願ひしますm( )m

G O F o r T h e N E X T ! ! !

二人の突っ込んでいった所　　体育倉庫　　にボツボツと歩いていくと

スガガガガガッ！

銃声。連射してる、ってこたア短機関銃サブマシンガンだな。  
でもまア、歩く速度は変えねエけど。

倉庫に近づくとつれ大きくなってくる銃声。一旦物陰に体を隠して、そちらを覗く。

さっきのセグウェイ…！　　たく、終わってなかったのかよ。  
ってキンジ！？　　無防備に目の前に出てくバカが　　雰囲気  
違う？

ズガガガガガガッ！

キンジはセグウェイの前に身をさらす。その頭向けて放たれたUZIの9ミリパラベラムを背を反らせて避けつと、自分のベレッタ（通称キンジモデル）を左から右に一薙ぎした。それから放たれた7発の弾丸は、今キンジの目の前にあつたセグウェイの銃座を吹き飛ばす。

…オイオイ、本当にキンジか？　　いや、入試の時はこうだったな。  
…何かしらの能力？　　俺と同じようなナニカつてことか。  
でもまア

「だから、詰めが甘いつてンだろオが！」

ズガンッ！

後ろを向いたキンジの背後に出てきた残り一台のセグウェイ。その銃座を俺の銃　H&K・USP　で撃つ。弾丸は命中、その銃座を吹き飛ばした。

「ったくよオ。余計な面倒かけんなよ“裏キンジ”」

自分の銃を懐に仕舞いながら、キンジに話しかける。

ああ、それとこのよく分かんねエ能力を発動させたキンジは『裏キンジ』って呼ぶことにした。

「すまないな、行方」

それだけ俺に言ったキンジは、体育倉庫の中に戻った。

俺もその後が続いて倉庫の中に入る。

入って中を見回すと、一段目が吹き飛んだ跳び箱（防弾製）の中にさっきのピンクツインテのやつが居た。

キンジの方を向くと、跳び箱の中に引っ込む。…モグラ叩きみてエだな。叩いてやるうかなア…拳銃のグリップの底で。

「　お、恩になんか着ないわよ。あんなオモチヤくらい、あたし一人でも何とかできた。これは本当よ。本当の本当」

「あつそ。んなこたアどうでも良い。オマエ、そんなところで何やってんだア？」

跳び箱の中に引っ込んだコイツは、なにやらゴソゴソと動いている。



「仕方ないでしょ！　そ、それよりアンタ。今のでさっきの事をうやむやにしようつたってそうはいかないんだから！　あれは強制猥褻いせつ！　レッキとした犯罪よ！」

そうキンジを指差しながら言ったアリアの言葉に、俺は笑い出す。

「ハハツ！　裏キンジ、オマエこの女に何したんだ？　胸でも揉んだかア？　ま、俺は知らねエけど」

「っ……！　こ、コイツ、わ、私の服を脱がそうとしたのよ！」

「……アリア。それは悲しい誤解だ。不可抗力だよ、あれは」

すぐに反論したキンジが自分のベルトを外して、跳び箱の中に投げ入れる。何してんだア？

それにアリアってのア　コイツの名前か。

すぐにコイツ　アリア　は、跳び箱の中から出てくる。スカートをキンジのベルトで抑えてるってこたア、ホックが壊れたってことか。

「あ、あれが不可抗力ですって！？」

……ん？

コイツ、立ったのか？　これで？

チビすぎんだろ。どオ見ても、144位しかねエぞ？

ツインテを止めてるツノみてエな髪飾りで上乘せしても145ねエだろオし。

「ハ、ハツキリと……あ、あんた……！」

キンジを睨みながら、真っ赤になる。ついでに拳も握ってる。

がいん！

なんでかは知らねエが、床を思いつきり踏みつけて

「あ、あたしが気絶してるスキに、ふ、服を、ぬ、ぬぬ、脱がそうとしてたじゃないっ！」

もしそれが本当なら、キンジにはロリコンの称号をくれてやろう。

「そ、そそ、それに、む、むむむ」

がいん！

また床を踏みつける。床に恨みでもあんのかア？

「胸、見てたあああっ！ これは事実！ 強猥の実行犯！」

顔…いんや、首まで真っ赤にしたアリアがキンジに指を突きつける。

「ふアア。なんか面倒そうだから、キンジ、後は自分でなんとかな」

なに？ 面倒ごとが好きなんじゃねエのかつて？

面倒ごとには、「楽しい面倒」と「本当に面倒」な面倒事があるんだ。

今のは、「本当に面倒」な方だ。

あとはキンジがどうなるうと…さっきのガバメントで風穴開けら

れよつと関係ねェ。

俺ア、後ろで騒いでる二人（主にアリア）を無視して体育倉庫を出た。

少しして後ろから

「この卑怯者！ でっかい風穴 あけてやるんだからぁ！」

つつーアリアのアニメ声が聞こえてきた。  
オイオイキンジ、今度はなにやらかしたんだア？

まア、これが俺、遙行方と遠山キンジ。

後に『緋弾のアリア』と呼ばれて、世界中の犯罪者を震え上がらせることになる鬼武偵、神崎・H・アリアの……

硝煙の二オイにまみれた、最っ高に愉快的な、出会いだっ たっつーわけだ。

- s e c o n d (後書き)

なんだか…主人公喋らないなあ…

原作どおりに区切ろうと思ったせいで、短くなっちゃいました。

それではまた次回

G o F o r T h e N E X T ! ! !

## 2弾 - f i r s t

(まつさか、能力を一瞬とはいえ使うことになるとはなア…見られてねエだけマシか?)

マスターズ  
教務科への報告を俺に追いついたキンジに任せて(押し付けて)、俺は教室に来た。

俺の能力『ベクトル操作』

内容はそのまま。触れている、あるいは間接的に触れているもののベクトル「向き」を操作する能力。チカラ

さっきはチャリの前に進もうとする慣性の向きをキンジのチャリの方に変更、さらに蹴りを入れてその向きへの力を増した。

しかも能力の発動中は、常に『反射』のフィールドを纏うことになる。

コレは俺に触れてきたものの向きをそのまま反射するもので、銃弾などはその銃口に向かって跳ね返っていく。まあ、その向きは任意で変更可能。

簡単に説明すると…

『核だろうとなんだだろうと反射するフィールド』

つーことだ。

俺が能力を使っている限り、どんな高い威力をもったものでも俺には通用しない。

自分で把握してる点だがその効果範囲に入ったとたんに引き戻すと、それを“内側<sup>オレ</sup>に向けて”反射してしまう…

だが銃弾では不可能であり、拳でそうしようともその効果範囲を見切らなければ不可能。まず常人には突破できない。

そして、俺はそれを常時使用はしてないためその効果範囲を探ろうとしてもチャンスは少ない。

普通こういう能力をもったヤツは超能力<sup>ステルス</sup>と呼ばれ、それを行使する武偵は『超偵』という。

彼らは自らの精神力を使ってその能力を行使する。つまり使える制限時間が存在している。

だが俺は違う。精神力を引き換えにするわけではなく、その能力の発動を演算して行使する。

俺には通常の超能力者にある“制限時間が存在しない”。

つまり、比類なき最強。

たとえ全世界を敵に回しても、こちらに人が生きることのできるもの（たとえば食料）さえあれば勝てる。

（まア、そんな本当に面倒なことしねエけど）

そして俺が能力を隠している意味は、考えれば簡単。

この圧倒的な能力を欲しがらないところは無い。

だが、俺を捕まえたりすることは不可能。

その後は恐らく殺そうとしてくる。

それも能力を使用した俺には無意味。

待っているのは、俺に対する恐怖の視線。

（それでも、アイツは知ってるがな…それに知られても俺は困らね

エ)

ああ、追加でなぜかは知らないが能力を使っている間、俺の髪の色がいつもの黒に白のメッシュから全て白に変わる。

…… コレはどうでも良いな。

さっきはたった一瞬の行使だったおかげで髪の色に変化は無い。

この能力は、別に俺の親が代々継いできたとかそんなんじゃない。あの時を境に俺に発現した能力。

それは別に良い。迷惑も何もしてない。むしろ強力な能力でありがたいと思ってる。

ただ、この能力は“人を簡単に殺せ過ぎる”。

手加減なしならパンチで人を貫けるし、相手に触れてその血流を逆流させて肉塊ザクロにしてやることだって簡単だ。

それに加えた一番の問題だが、俺は殺すことに戸惑いが無い。

無論、親しくしてきた友人なら戸惑う。だが知らない敵などを殺せといわれても何も感じない。ただ殺るだけ。

（ま、そんなこたア些細な問題だな。俺が自分で抑えりゃアいいんだからよ）

そんなことを考えてたら、どオやら同じクラスらしいキンジもこのクラスに入ってきた。そしてHR本ムルムが始まる。

問題はその後に起きたんだがな。

「先生、あたしはアイツらの間に座りたい」

なんとまア運命ってヤツなのかは知らねエが、同じ2・Aだったさっきのチビピンクツインテが俺とキンジを指差してほざきやがった。

キンジがイスから落ちたのが見えたが、気にしねエ。それと同時にクラス中のバカ共が騒ぎ始めやがった。

「オイオイ、何の冗談だピンクツインテ。なーんなーんですかア？俺とキンジになにか用でもあるンですかア？」

「誰がピンクツインテよ！ あたしには神崎・H・アリアっていう名前があるの！」

「な、なんでだよ……！」

「何をしようとおあたしの勝手よ！」

「よ、良かったなキンジ！ なんで二人なのか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！ 先生！ オレ、転入生さんと席代わりますよ！」

キンジの右隣、俺の左隣のヤツ 武藤剛むつむつ気がそう言いながら席を立つ。

コイツは車両科ロツの優等生で、特技は乗り物なら何でも運転できる……らしい。

「あらあら。最近の女子高生は積極的ねえー。じゃあ武藤くん、席を代わってあげて」

ウチの担任はそれをあっさり許可。

馬鹿共は拍手喝采。このクラスもオヤダ。



「キンジ、これ。さっきのベルト」

「なんだかさらに誤解を招くよオなことしてくれちゃってさア…  
ちなみにピンクツインテの制服は、どこから持ってきたのか上下  
共に新品になってる。」

「理子分かった！ 分かっちゃった！ これ、フラグばつき  
ばきに立ってるよ！」

「また馬鹿がでしゃばってきやがった…あア、鬱だ。  
今のは峰理子みねりこ、所属はキンジと同じ探偵科インクスタ。馬鹿。以上、説明終  
わり。」

「あ？ ダメ？ ンなら…コイツはネットばつかやってるおかげ  
か情報収集能力は高い。そのおかげだろうが、ランクはAだ。」

「キーくん、ベルトしてない！ そしてそのベルトをツインテール  
さんが持ってた！ これ、謎でしょ謎でしょ！？ でも理子には推  
理できた！ できちゃった！」

追加。コイツの制服は魔改造されてヒラヒラしたモンがとにかく  
付いてる。

そしてキーくんってのア、コイツがキンジにつけたあだ名。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような“何らかの行為”をし  
た！ そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！ つまり2人は  
熱い熱い、恋愛の真つ最中なんだよ！」

「あー、アホらし。くっだらねエ。ウザイ。うるさい。そして俺は  
どこ行った。」

残念なことにここは偏差値35の武偵高、馬鹿の吹き溜まり。すぐに周りも乗っかって騒ぎ出す。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間に!？」「影の薄いやつだと思ってたのに!」「女子どころか他人に興味なさそうなくせに、裏でそんなことを!？」「フケツ!」

「お、お前らなあ……」

キンジが自分の机に突っ伏したところで

ずぎゅぎゅん!

2発の銃声。

馬鹿騒ぎしてたクラスの馬鹿共が一瞬で黙る。

簡単に言うと、真っ赤になったアリアが撃った。

さっきの2丁のガバメントを持った両手を左右に広げて。

チンチンチーン……

「れ、恋愛なんて……くっだらない!」

落ちた空薬莢の音も聞き取れるほど静かになった教室にピンクツインテ　もうメンドイ、アリアの声が響く。

一応、ここでは射撃場以外での発砲は『必要以上にしないこと』ってことになってる。

つまり、したけりゃして良い。ま、銃撃戦が当たり前の俺ら武偵は軍隊並に銃撃に対する感覚を麻痺させとかなきゃいけねエンだけだよ。

だからって、自己紹介で発砲したのは多分コイツだけだ。

「憶えておきなさい！　そういう馬鹿な事を言つヤツには……」

コレが、神崎・H・アリアが武偵高の生徒に発した最初の言葉。

「　　風穴あけるわよ……！」

## 2弾 - first (後書き)

「緋弾のアリア」アニメが楽しみですね。

アリアの声は釘宮さん。

そしてOP歌ってるのはMay'nさん…最高!!!! (イヤッ  
フー  
!!)

げぶげぶ、テンションが崩壊しましたねすみません。

では、また次回

G O F O r T h e N E X T ! ! ! !

- s e c o n d (前書き)

2000字に届かなかった。

そんなですが、どうぞ

昼休み、詰め寄られて時間を潰されたくない俺は屋上。

それも屋上の出入り口の建物の上で寝た。

そのせいで午後の授業も寝過ぎしちゃった：まア、いいだろ。

夕方

俺はキンジと部屋に帰ってきた。

キンジはソファに座って俺はベッドに寝転んでる。

(あア、静かだなア)

今朝のチャリジャック：ありや何がしたかったんだア？

あの事件については、既にセグウェイの残骸を鑑識科が回収・調査してる。<sup>インケスタ</sup> 探偵科も調査を始めたらしい。

まあ、俺にやアどオでもいいんだが：武偵高は殺人未遂なんざ日常茶飯事。生徒同士で銃をブツ放してんだから当たり前っちゃア当たり前だがな。<sup>アサルト</sup>

実際、強襲科のドンパチはあれより危険度が上だ。

とは言つものの、イタズラだったなら俺はすぐさまそいつを殺しに行ってる。

あんの爆弾魔野朗は

『武偵殺し』のオリジナルと見て間違

いねエ。

武偵殺しについて一度だけ調査したことがあんだが…手口が全く持って似てる。

同じようなことをやるだけだっつーなら、簡単だ。

だが、武偵殺しの方法には技術力も必要。あのセグウェイを改造してたのがいい例だ。

それに……………

ピンポーン

「オイ、キンジイ客だぞオ。オマエ出る」

キンジは無反応

ピンポンピンポーン

「出るって。うるせエし」

…居留守でも使っつもりなのかア？

ピポピポピポピポピポピポピポピポピポーン…ピポピポピンポーン！

「だアー！ うっせエ！ オイキンジイ！ さっさと出るー！」

リビングへのドアを開け放ちながら言う。  
キンジは立ち上がるところだった。  
そのキンジと一緒に玄関に出る。

「誰だよ………？」

キンジが渋々…それもかなり渋々、ドアを開ける。

「遅い！ あたしがチャイムを押したら5秒以内に出ること！」

神崎イイ…：テメエなにしにきやがった。

「か、神崎！？」

「キンジうるせエ。テメエもどっか行け」

ガン！

入り込まれる前にドアを蹴って閉める。

ズガガガウン！

うわ、あんにやろうドアに向けて銃撃してくれやがった。  
だが残念だったなア。ここのドアは防弾性だぜエ？

『開けなさい！！ 早くあけないと風穴！』

「だーから、うるせエつつつてんだろオが。何しにきやがった」



『さつきも言ったけど、なにをしようかあたしの勝手よ！早く開けなさい！』

あんのガキは常識っつーもんをしらねエのかア？  
全く、非常識にもほどがあるぞ。

「で？ キンジ、どうするコイツ」

「ここで俺に振るなよ！」

「ま、いいや。俺は久々に自分の部屋に帰ることにすっから、後は任せた」

「はあ？ ちょ、ちょっと待てよ！」

こっちはなにやら面白そうなので放置。

ドアを開けると、アリアに睨まれたが無視して本当の自分部屋に

「ちょっと待ちなさい」

帰れなかった。

そのままキンジの部屋に引き戻される。  
いや、振り払ってもいいんだけどよオ。  
なーにか面白いことが起きる予感がしたから、従う。

「ちよつ、神崎！？」

「アリアでいいわよ」

「お、おい！」

キンジをほぼ無視してどんどん進んでいくアリア。  
あア、もちろん俺は引つ張られてる。

「待て！ 勝手に入るなっ！」

「トランクを中に運んどきなさい！ ねえ、トイレどこ？」

トイレを見つけたアリアは俺を放すと、とてととトイレに入っ  
ていった。

「キンジ、オマエほとんど無視されてンじゃねエか」

「ったくなんなんだよ。それにトランクって……」

「アレ、だろ？」

俺がキンジにあごで示す先は玄関。

そこにはアリアのものと思われる車輪つきのトランク。

なにやら高級そうだが、そういうのには詳しくねエから知らン。

キンジがトランクを運びにいくと、アリアがトイレから出てくる。

「さっきそっちのは自分の部屋って言ってたし、アンタここに1人  
なの？」

「オイコラ、そっちのってなんだ。こんのピンクツインテ。俺は『  
遙行方』はるかゆくえっつー名前があんだよ」

「だから！ 誰がピンクツインテよ！」

「いや、オマエが。まんまじゃねエか。」

「あたしは神崎・H・アリアよ！ 覚えておきなさい行方！」

「まったく、なんだよその小悪党が言いそくな捨て台詞は」

「う……ふん！ まあいいわ」

「なにがいいんだよコノヤロウ。」

リビングの奥、窓際まで歩いたアリアは

くるんっ、とこちらを振り向く。

それを追うように長い2つのツインテが夕日に輝いて曲線を描き出した。

そして

「 キンジ、行方。あんたたち、あたしのドレイになりなさい  
！」

フザケてるも大概にして欲しい台詞を吐いてくれやがった。

- s e c o n d (後書き)

早くアクションに入りたいです…描写は期待しないでください。

アドバイスもらえると嬉しいです。

それではまた次回

G o F o r T h e N E X T ! ! !

「あたしのドレイになりなさい！」

そんな宣告を押し付けられた俺とキンジ…まア、従うつもりはさらさらねエけどな。

つーか、ありえねエ。

事件に急に介入してくる、コレは良い。

あの時アリアが言った通り武偵憲章に『仲間を信じ、仲間を助けよ』ってのがある。

でもまア…俺の場合、スナイパー以外の仲間は邪魔なだけなんだけど。

押しかけてくる…ここからオカシイ。

しかもトランクって…認めねエ限り居座るつもりなんじゃねエのか？

ンでもって、「ドレイになれ」は殺意が湧くほどふざけた話だ。誰が自分より弱いやつの下に付かなきゃなんねエンだよ。

「却下だ。ドレイになれ？ ふざけるのも大概にしとけよ？」

「ふざけてなんかいいわよ。あんた達はあたしのドレイにするの」

「けつ、テメエの国にやアいまだに奴隷制度でも残ってるのかア？  
それになア、自分より弱いヤツに従う馬鹿なンざいねエよ」

「朝危なかつたのに、よくそんなこと言えるわね」

「残念ながら、あんな玩具オモチャどうとでも出来る」

「じゃあなに？ あんたはあたしよりも強いと？」

「そういつこつた、双剣双銃カトラのARIAさん？」

悪リイが…インやここじゃ正当だったな。

俺らは『武偵』 『武装探偵』 だ。調べさせてもらったぜ？  
オマエとその周辺情報をなア。

「っ いいじゃない、やってやるわよ。分かっているとは思っけど、  
負けたらあたしのドレイにするからね」

「ハッ、テメエじゃあ俺に傷一つ付けられねエよ…あアそつだ。そ  
このキンジは俺が勝とうが負けようが好きにしてもらって構わねエ  
から」

ケケケツ、いままで我関せずみてエな顔で突っ立ってたお礼だ。

「はあ！？ ちょっと待て、俺は良いなんて「ンじゃ、決着はその  
うち着けるとして今日は帰らせてもらうが、構わねエよな？」おい  
「！」

「ふんっ！ 別に良いわよ」

「じゃなキンジ、あと任せたわ」

「だからおい！ 待て！」

キンジ？ 何それ美味エのか？

……口に入れたかねエけどな。

そんなわけで、俺は本当の自分の部屋 つつてもこの隣なん  
だが、そこに帰る事にした。

…アリアとの戦闘を楽しみにしながらなア。

「タダイマー、って誰も居るわけねエな」

最近キンジの部屋にばかり居たせいで、ここには帰ってきてない。  
さて、どうすつか。やることなンざねエしよ。

とりあえず、冷蔵庫から缶コーヒーを出してからソファアに腰を  
おろす。

ちなみに、時間はもう夜と言っていい。

「……………ン…飽きた。この缶コーヒー飽きちまった」

コレ何本目だったか？ まあいい、冷蔵庫の中のコーヒーはコレ  
で最後だったな。



コンビニでも行くか…どうせ暇だしなア。

んなわけで、コンビニ

『いらっしやいませー』

…機械的すぎやしねエか？

さすがに棒読みは無エだろ…

お？　ありゃキンジじゃねエか。どうした？

「オイ、キンジどうしてこんなところにいんだア？　アイツはどうしたよ」

「なんかしらねえけど追い出された」

「（笑）自分の部屋から追い出されるとか…オマエもうちよつとなア」

「やめろ！　そんな目で見るな！」

「アン？　いや、だって…なア。流石に……」

「頼むからそんな目で見ないでくれ！！」

キンジを弄るのは楽しいなア、オイ。

「ンじゃま、がんばれ」

どの缶コーヒーにすっかなア。コレは飲んだ、コレも飲んだ…コレはどうだ？

ここの缶コーヒーもほとんど飲んじまったか…？

お、コレ飲んだことねエな。今日はコレにしとくか。

とりあえず、そこにある分全部をカゴに入れて買う…ビニール袋  
重めエな。

ちなみにキンジは既にコンビニの中には居ねエ。

んなわけで帰宅

「ん？ メール？」

帰宅後。コーヒー片手にPCを開くと、新着メール。

内容は…仕事？

おオ、ひっさびさに暴れられる仕事じゃねエか。報酬も十分だ。

くつくつく、早速動こうかねエ。犯罪者コイツラに地獄ってヤツを見せて  
やんよ。

さっきから隣の部屋がうるせエことは気にしたら負けだからな、  
さっさと準備すっか。

コレはアイツにも行ってんのかア？

武偵高、男子寮屋上

「さアてとオ、楽しませてくれよなア！」

一つの人影が、屋上から飛び立った。その背に4つの竜巻を携えて。

やっぱり良いねエ。こつこつ仕事は最高オだ。

ババババババッ！

ズガガガガッ！

相手の犯罪者…もといテロ未遂犯共の持っている武器はどこから

手に入れたのは知らねエし興味もねエがサブマシンガンのMP5。  
目の前に居るのは一人。それから俺に向け発射され、着弾した。

あちらの銃口とその周辺に。

跳ね返された銃弾は銃の内部を蹂躪、銃本体を貫通して相手の肉  
体までもを蹂躪。

「ぐがああつ!?!」

「ハッ、どうしたア? お仲間さんはどこ行っちゃまったのかなア?」

今日の前に居るヤツのほかにも3人は始末した。

でもよオ、4人でテロなソ考えるわけねエ。まだ居るソだろ?

「クソッ!」

「死ねえ!」

ほら、2人出てきた出てきた。

コイツの始末は後回し…インヤ、出血だけで終わりだな。

バババババババツ!

バババババババツ!

「だからさア、いい加減学習しようぜエ? 三下ア。ソなもん効か  
ねエンだよオ!」

わざと反射の設定を横に逸らす。  
そして足を軽く上げて床に振り下ろす。  
それだけでそこから衝撃波が広がり、銃弾によって壊された物の破片はヤツらに襲い掛かる。

「ぎゃあああつー！」

「じはあつー!？」

「おおつと悪リイ悪リイ、デケエモンも飛んでつちまったなあ」

さアて、どう料理してやるオカ。

「さてと、逝つちまいなあ!!」

一人は腹を蹴って吹き飛ばす。能力のおかげでこっちに跳ね返ってくる反動も反射するから、単純に2倍以上の威力の蹴り。

「グボアツ！」

吐血しちまつてるが…土台どオでも良い。

あと一人はあんまり痛めつけないでやるか。リーダー格みてエだからな。

処理部隊に拷問でもさせるか。情報を吐いてもらわねエとなア。

「(ピッ)(こっちは終わったぜ? 後は頼んだわ、このまま帰る」

トランシーバーからの返答を待たずに、その場を後にする。

戻る道には眉間に穴ぶち開けられた連中が居たが、そんなことは気にしねエ。

まあ、やったのは俺が唯一頼れるスナイパーだってことは言っとく。

その場から立ち去った白髪の少年の髪にも、服にすらさつきまで  
の返り血は無い。

むしろ残るようなら、このような仕事は任されない。

故の“最強”なのだから。

- t h i r d (後書き)

Q 能力おおっぴらに使ってますね。

A 裏の仕事だから良いんです。

そんなわけで今回どうでした？

作者の動力源である感想・アドバイスお願いしますm( )m

ではまた次回

G o F o r T h e N E X T ! ! !

あの“仕事”から帰ってきたときには、武貞高はすでに放課後になっっている。

別にそういった日をまたぐ仕事も武偵にはある。だから特に何も言われることは無い。

…本当に早く帰ってこようと思ったら、能力使えばいいんだけど…  
日中の空を飛ぶわけにもいかねエしなア。

「久々に暴れたのアイインだけどなア…物足りねエ。能力使わずに  
やったほうがよかったのかア？」

ああ、そっぴやそのうちアリアと戦うんだっただか？

俺の能力は反則じみてっからなア、アリアとの戦闘じゃ使わねエ。

…それこそワンサイド・ゲームだ。

っーかキンジどこ行った？ 部屋に居ねエし。

ま、良いや。アリアにメールでも送っとくか。

戦いは明日だ、ってな。

…夕方、日も落ちた頃、キンジは帰って来た。  
びしょ濡れで。



「オイキンジ、なんでオマエそんななんだア？」

「ああ行方、居たのか。いや、猫探しでちよつとな…」

「猫探しイ？ 久々に仕事しに行ったのか？」

「アリアを撒こうとおもったんだけどな。無理だった」

Sランク武偵を撒けるEランク武偵はいねエと思うんだけどよ？

「あらら、ご愁傷様ア。で？ そのアリアは？」

「もうすぐ帰って来るんじゃないか？」

「あそ、俺戻るからアリアにメール見とけて言っとけ」

「あ、ああ。わかった」

俺がアリアに送ったメールの内容は。

例の決着付けるぞ。

時間は明後日の放課後。

場所は空き地島でいいだろ、そっちの希望の場所でもかまわない。

そういうことだ。

二日後の放課後。

あっちの希望で場所が強襲科の訓練場になった。

別にかまわねエ、俺も強襲科だ。

にしてもギャラリー多いぞ？ 強襲科のメンツはほぼ全員いるんじゃないねエか？

まあ、Sランク同士の戦闘なん滅多に見れるわけじゃねエが。

「あら、逃げずに来たのね」

「バカ言え、こっちから言ったんだぜ？ オマエこそよく逃げなかつたなア」

「ふん、じゃあさつさとはじめましょっ？」

「上等だ」

アリアはガバメントを両手に、俺もUSPをホルスターから1丁抜く。空いた片方にはアサルトナイフを。

「かかってこいよ。先手は譲るぜ？」

「舐めないでよ！ でも、その好意は受け取らせてもらっわ！」

バリバリバリッ！

左右のガバメントがマズルフラッシュを閃かせる。

それを伏せるように身を屈めて避け、その低い体勢のままアリアに接近する。

「そらよつと!!！」

左手で逆手に持ったナイフを振り上げる。

アリアはそれをバツクステップで避けた。

俺はその振り上げた体勢のまま、右手のUSPでアリアを撃つ。

バババツ！

カスタムを施してある俺の銃は、3点バーストで弾を撃ち出す。

それを小柄な体を生かして避けたアリアは、また此方に向けて発砲してくる。

つたく、ガバの弾は食らいたくねエ。 .45ACP弾の威力は洒落にならねエかな。

…それを言うならデザートイーグルは問題外だが。

「くっ、」のっー」「

「はっはア！ その程度か三下ア！」

「なにをっ！」

一瞬でも隙を見せることの無い銃撃戦。

装弾数で言えばこちらのほうが有利だが、威力ではあちらが上だ。いくら武偵高の制服が防弾制服だとしても、衝撃を殺すことはできねエ。

ガキガキンッ！

それでも案の定、先に弾が尽きたのはアリアだった。スライドが開く。それをホルスターに戻すと、背中から、

じゃきじゃき！

寸詰めの日本刀を2振り。

でもまア、こっちも弾はあと数発しか残ってねエ。

…俺も双銃使いにでもなるかなア。

ま、それはともかく近接戦闘と行きますかア！

右手のUSPをホルスターに仕舞う。

そして左手のアサルトナイフも、こちらに向かってくるアリアに向けてダガーのように投げつける。

「あんたバカなの？ 丸腰じゃない！」

「そんなバカなこと、誰が考えるってんだよ三下ア！」

右手の手元でとあるロックを外してから、“手には何も持たず”  
アリアに突っ込む。

アリアの2振り of 日本刀から繰り出された鋭い突きを、右側に回避。

そして

シュキン！

「チェックメイト…でいいんだよなア？」

俺の右腕の袖口から、手の甲を超えて飛び出したブレード。  
それを、アリアの首筋に添える。

「　　っ、わかったわ。私の負けよ」

アリアの負け宣言が聞けたところで、ブレードを首から放して元のようになん。

「俺ア、接近格闘の方が得意なんだ。それと、命令じゃなくて仕事の誘いなら、受けてヤンよ」

アリアにそれだけを言い残して、強襲科の棟から出た。

おあア…それにしても弾使っちまった。

あと……5発しか残ってねエな。

まアそれでも…良いか…？

それにしても、場所変えられるとはなア…

空き地島なら少しくらい能力を使ったところで、なんの問題もねエのに。

別に見られても俺は困らねエけどな。

「ン？ おお、よオキンジ」

「行方か。お前今日はアリアと戦うんじゃ？」

「もう終わらせた。もちろん俺の勝ちだ」

「はあっ…てことはお前はアリアから解放されたのか…」

「そういつこった。アリアのことはテメエに任せる」

「任されても大いに困るんだが？」

「知るか。テメエが目エ付けられたンだろオが」

「それでもなあ…不幸だ」

ツンツン頭の男が頭の中に浮かんだんだが：気にしちゃいけないな。

「ま、仕事の誘いなら受けるって言ったかな。たまには同じ仕事するかもしれねえ」

「行方、お前って本当面倒事が好きだな」

「違いエよ、ただ面白いことを探してるだけだ。アイツからはそういう空気がしたからな」

「ってことは、俺はそれに巻き込まれること間違いなし…だよな」

「そついうことだ。ま、がんばるんだなア」

「ほんつとうに不幸だー！」

でも、オマエはそれで変われるかも知れねえぜ？

テメエは変われるだけの才能があるんだ、腐らせんなよ。

- fourth (後書き)

最後のところ、主人公は様々な面でキンジの事を少なからず認めます。

それと行方が使ったブレードについてはハガレンよりも「Angels Beats!」のハンドソニックver1をイメージしていただいたほうが分かりやすいかも。

ではまた次回

Go For The NEXT!!!



戻ってきた。『強襲科』通称 『明日無き学科』にキンジが。一応だがこの学科の卒業時生存率は97.1%…つまり、10人居れば3人は卒業できねエ。だからこそ『明日無き学科』。そして武偵の暗部。

「よオ、キンジ。ここに戻ってくるなんざ死ぬ気にでもなったかア？」

「死ぬ気はねえよ。もしそのときになったらお前を盾にしてお前を先に死なせる」

ここの挨拶は基本的に「死ぬ」という単語が入る。だから『死ぬ死ぬ団』とか呼ばれるんだよなア…

「それで本音はなんだ？」

「アリアだよ。アイツと『一回限り、事件を一件だけ一緒に解決してやる』っていう約束しちまったからな」

「…なんだってそんな約束してんだア？」

「さあな。つーかお前強襲科の授業に参加してんのかよ」

「暇つぶしだ。単位はとっくに溜まって。2回くらい卒業できる

んじゃねエか？」

一時期暇すぎて事件を片っ端から力技で解決してっただけだからなア…。

「その単位の半分を探偵科にして俺が欲しいよ。んじゃな、俺はもう行くわ」

キンジが強襲科に戻ってきた翌日。

まだHRが始まる前の教室。

自分の机に足を乗せてボーっとしてたら、携帯が鳴った。

ピピピピピピ…ピッ

「誰だア？」

『アリアよ。昨日、仕事の誘いなら受けるって言ったわよね？』

「ああ、言った。仕事か？」

『そつよ。できるなら今すぐに女子寮の屋上に集合！』

「了解。すぐ行くわ」

プチッ

「さて、行きますか」

一般授業なソギつまソねエから、ちょうど良いじゃねエか。

「それで？ 仕事ってなんだア？」

「武偵殺しよ」

雨の降りしきる屋上。

そこでアリアは無線機に向けて叫んでいた。

今回俺の武装はいつもとは違う。

いつも通りの制服だが、肩にケースに入ったスナイパーライフル  
『H&K PSG-1』をかけたる。

それにしても武偵殺しねエ…こないだのはやっぱオリジナルだったってことか。

屋上を見渡すと、アリアと俺外には階段のひさしの下に狙撃科の  
レキが体育座りで座ってる。

レキ　狙撃科<sup>スナイプ</sup>で入試から今までSランクの天才少女。(ちなみに俺のスナイプでのランクはA)  
体は細くて、身長もアリアより頭半分高いくらいだな。  
それでも腕は確かだ。確か絶対半径は2051メートル<sup>キリングレンジ</sup>だったかア？

それに加え、外見も淡い水色のショートカットの美少女：なんだが、無感情でロボットみてエな性格だから、目立たない女子だ。

結構デカイヘッドフォンを付けていて、声は届きそうにねエ…いい加減直せその癖。

だから、コツコツとヘッドフォンをノックする。  
そうすると、ヘッドフォンを外して此方を向く。

「レキもアリアに呼ばれたのかア？」

「はい」

「そオか…こないだはご苦労さんだったなア」

「いえ、行方さんこそ」

このまえの仕事…まあ、あれだ。  
それで言った俺が一番信用できるスナイパーがコイツ。  
俺の能力についても知ってる。

「あっけなかつたよなア」

「能力を使わなければ良いのでは？」

「できねエことはねエが、オマエに掛かる負担がでかくなる」

「そうですか。ありがとうございます」

俺の言葉にそれだけ言うと、チャキツと肩にかけてる狙撃中ドラグノフ狙撃銃。スリムなセミオート狙撃銃だ。を肩にかけなおす。

「こういうこと言えば、アリアなら軽く慌てるのかしそうなんだけどなア…」

ババババツというヘリのローターの音で意識を空に向ける。

そこには、武貞高・車両科のシングルローター・ヘリ。

それが、屋上（こ）に着陸しようとしていた。

それと、俺がレキと話している間にキンジも呼ばれていたようにアリアと同じC装備（SATとかのに似てる）を身に付けてる。

「で？ アリア、今回のミッション内容と詳細は？」

「ミッションはジャックされたバスの乗員全員を救助すること。犯人は『武偵殺し』、そのバスはキンジの男子寮に7時58分に停留したものだよ」

「…わかった。俺は今回スナイパーで行かせてもらうぜ？ バスに對して3人も前衛（フロント）はいらない。爆弾にかかるヤツと車内に入るヤツ2人で…オマエとキンジだな。で十分だ……なにか間違いは？」

「何も無いわ。もともとあんたがそれを持つてる時点であたしとキンジで行くつもりだったから……行くわよ！」

「……クソツ。ああやるよ！ やりゃいいんだろ！」

「キンジ、なんでそんなヤケクソになつてんだア？ 事件を一件だけ一緒に解決するってアリアと約束したのはテメエだろオが」

「それはいいんだよ。ただ、説明が少なすぎるだろ！」

「俺が聞いた内容だけで十分だと思うんだがなア……」

「お前達と俺は違うんだ！ ったく……アリアは……」

確かに少ない気もしたが、あんなだけ情報があれば十分だろ。最悪な時は相手の情報なしで戦うこともあるからな。

「キンジ。これが約束の、最初の事件になるのね」

「大事件だな。俺はとことんツイてないよ」

へりに乗り込んで話をしているアリアとキンジを尻目に自分の準備をする。

ケースからPSG-1を出して不具合が無いか簡単なチェック。スコープの調整をして、<sup>マガジン</sup>弾倉を入れる。

その後セーフティをかけると、自分が座っている隣に立てかけて置く。

付けたインカムから聞こえる通信科コネクトの話に耳を向ける。

ジャックされた武偵高のバスはいすゞ・エルガミオ…これは聞いてもわかんなねエ。

キンジの寮の前に停まった後はどこにも停まることなく暴走。その後バス内の生徒から緊急の通報があったらしい。

暴走したバスは学園島を一周した後、青海南橋を渡って台場に入ったとのこと。

またアリアとキンジがなにやらインカム越しに話をしているが、ヘリのローターが撒き散らす轟音で直接は聞こえない。

アリアは手元で自分の2丁の拳銃　コルト社の名銃・ガバメントをカスタムしたヤツみたいだ。あれはもうもろもろの特許が切れているから、かなり自由な改造が出来る。　をチエックして。その銀と黒の銃は色が違うだけで同じヤツみてエだ。

『見えました』

インカム越しに聞こえたレキの声。

アリアとキンジは防弾仕様の窓に揃って顔を寄せる。

俺は…どうせ見えないだろうから見ない。

『なにも見えないぞレキ』

『ホテル日航の前を左折しているバスです。窓に武偵高の生徒が見えています』

『よ、よく分かるわね。あんた視力いくつよ』

『左右ともに6・0です』

な？ どうせ見えないだろう理由だ。

俺たちとレキじゃ見えてる距離が違う。ちなみに俺の視力は2・0位だったはずだ。

ヘリのパイロットがレキの言ったあたりへ降下すると、走ってい

る武偵高のバスが見えた。

速エな。いくつくらい出てんだ？

バスは車を追い越しながら、テレビ局の前を通過してく。

『空中からバスの屋根に移るわよ。あたしはバスの外側のチェックする。キンジは車内で状況を確認、連絡して。レキと行方はヘリでバスを追跡しながら待機』

さアて、俺の楽しみは少ねエかもしれねエが…ミッションスター  
トってかア？



- f i f t h (後書き)

アクセラさんの口調維持が難しいです…

感想・アドバイス等お願いしますm ( ) ( ) m

ではまた次回

G O F O R T h e N E X T ! ! ! !

- sixth (前書き)

2週間ぶりです……すみません。こつち放置してすみません

すみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみません  
すみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみません  
すみませんすみません

えー、みたいなことしてすみません(笑)

今回、少し雑かもしれませんが。アクセラ口調…

では、どうぞ

Ariaは天井から、強襲用パラシュートを取り外して準備を始めた。

『内側……って。もし中に犯人が居たら危ないぞ』

『武偵殺し』なら、中には入らないわ』

Ariaとキンジの会話が、インカムをとおして聞こえてくる。

「キンジくうん。オマエ馬鹿か？ 爆弾仕掛けたバスの中にワザワザ居る、自殺志願者みてエな犯人が居るわけねエだろオが」

『もし、そうだとしたらどうするんだよ。周りを巻き込んで自殺したい馬鹿だったら』

「あん？ なら、何でワザワザ俺らを誘導するような時間稼ぎしてんだよ。自殺志願者なら、今すぐにも爆破しちまえば良いだろオが」

『そりゃ、そうだが…』

まったく、そんならい“今の”キンジでも考えつけ。

『話は終わり。いくわよキンジ！』

『ああ、もう…了解だ』

二人はほぼ自然落下の速度で、バスの屋根の上に着地。  
そのとき、キンジが足を滑らせて落ちそうになったが、アリアが手を伸ばして掴んだ。

「あんだア？ えらく鈍ってるなア。少なくとも強襲科アサルトに居た時のキンジなら、失敗しなかったんだが…」

『ブランクというものは、大きいですから』

「まアな。今度鍛え直すかねエ」

レキとの会話はそれっきりで、地上のバスに意識を向ける。

キンジはすでにバスの内部へ突入、アリアはバスの後部からワイヤーを使いバスの下を覗き込んでいる。

「アリア、爆弾はどうだア？」

『あつたわ。カンジスキー 型のプラスチック爆弾、武偵殺しの十お八番はこね。見えるだけでも 炸薬の容積が、3500立方センチ

「はあるわ！」

『なっ…バスどころか電車でも吹き飛ばぞー!?』

通信を聞いていたキンジが割り込んできた。

「わかってるっつーの。それを対処するのが今回のミッションだろオが」

そこで、バスの後ろに真っ赤な車影が迫っているのが確認できた。

「ん？ どういうことだ。今、道は閉鎖されてるんじゃないのか？」

『あれも犯人のものでしょうか。無人です』

レキの忠告どおり、その真っ赤な車ルノー・スポール・スパイダーに人影は無く、座席にUZIウージーが設置されていた。

「チツ、ここからじゃ撃てねエよなア」

今現在のバスの位置は市街地。高層ビルが立ち並んでる。狙撃は不可能だ。

そんな間にも、ルノーはバスの後部に張り付いて

ドン！

アリアを押し付けるように、バスにぶつかりに行った。

『大丈夫かアリア!』

キンジの声に応答する声は無い。

だが、上から見ていてアリアが落ちたのは確認できてない。血が地面に落ちてる様子も無い。

だが、中のキンジには状況はわかってないらしく、キンジはバスの窓から上半身を乗り出す。

その間にルノーはバスの横に回りこんで、そのUZIの銃口をバスへ向ける。

「チツ!」

弾丸用のケースから、PSG-1用の弾丸一発を取り出す。

そしてルノーのUZIが火を噴く前に、能力使用状態へ。その状態で手に持った弾丸を指で撃ちだす。

ズガンッ!

俺が放った弾丸は、UZIごとルノーの座席を貫く。

スナイパーライフルよりは直線での命中精度が落ちるとはいえ、こつちの方が撃つまでが早い。

それにベクトル操作なら、弾丸の向きを大気の流れを変えることで変えられる。

「まったく、手間かけせんなっつーの」

能力を解除。髪の毛の色も白から、黒メインの白メッシュに戻る。

そしてバスはそのまま、猛スピードのままレインボーブリッジにさしかかる。

キンジは応答の無いアリアが心配になったのか、屋根の上に這い上がってきた。

それと同時に、バス後部からアリアもワイヤーで這い上がってくるのが見えた。

アリアのヘルメットが無いのは、さっきの衝突でぶち割られたんだろ。

「レキ、お前は爆弾を頼む」

「了解しました」

見渡しの良い橋の上だ。撃つには丁度良い。

PSG-1を構えて、スコープを覗き込む。そして、そのスコープにルノーをおさめた。

「仕舞いだ」

引き金にかけた指を屈伸させる。

パン！

乾いた発砲音と共に、弾丸はルノーの右前輪を捕えた。

パン！

2発目。今度はボンネット エンジン に弾丸を撃ち込む。  
む。

スピンのいたルノーは、ガードレールに衝突。直後に

ドオンッ！

爆発した。

俺の射撃が終わり、すぐに隣のレキから

パン！ パン！ パン！

3回の銃声。

その弾丸は、バスの後部。爆弾を保持している部品を弾き飛ばす。  
バスから、爆弾が外れて道路を転がった。

『 私は一発の銃弾 』

パン！

再度の銃声で爆弾は中央分離帯の近くに弾き飛ばされる。

『 銃弾は人の心を持たない。故に何も考えない 』



パン！

5発目。その銃弾は爆弾に当たり、爆弾はバウンドしつつ中央分離帯からその下の海に落下。

『ただ、目的に向かって飛ぶだけ』

レキが目標を弾くときに言う台詞が終わったところで

ドウウウウッ！！！！

爆弾は盛大な水しぶきを上げつつ、水中で爆破された。

「……ミッシヨコンプリート、ってかア？ レキ、おつかれさん」

「……………はい」

なんとなアーク。本当になんとなアーク、レキの頭に手を置いてポフポフと撫でた。

……レキって身長低いからよオ、丁度良い位置なんだよなア。

ってオイ、レキ。どうしてちょっと赤くなるんだ？ 俺はオマエにフラグを立てた覚えは無エぞ？

下では、レインボーブリッジを渡りきったところでバスが停車して、後処理の連中が既に集まって来てた。

俺はインカムを通して、アリアに話しかける。

「なあ、アリア」

『なによ?』

「俺らはこの後どうすりゃいいんだマ?」

『そのまま、ヘリで武貞高に戻っていいわよ』

「わかった」

「てわけだ。聞いてたよなア操縦者さんよ」  
パイロット

操縦席の方を向いて…向く必要はあんまりねエンだが、ヘリのパイロットに言う。

少し横を向いたパイロットは肯首で伝わったことを表現してきた。

そして、そのまま俺とレキは、武貞高への帰路についた。

- sixth (後書き)

3000字に届かないのは、個人的に微妙です。でも、今回は丁度区切りやすいところだったので。

それとアリアの額の傷はこの作品では無しの方角で。

では、感想・アドバイスお願いしますm( )m

Go For The NEXT!!!

- s e v e n t h (前書き)

四ヶ月ぶりの更新……

久々に書いた + 書き方変更 (三人称に) のおかげでおかしいことが  
多々あるかも……

とりあえず、どうぞ。

『武偵殺し』が犯人と思われるバスジャックから数日、行方は新宿に繰り出していた。

……とはいっても、当ても無くふらつくだけなのだが。

そんな行方は不意に横を向いて、何かを見つけたような顔をしてニヤリと悪どい笑みを浮かべ、足の向きをそちらに変える。

とある人物の真後ろまで来たところで、周りからは見えないうちに、行方はその背にUSPの銃口を突きつけた。

「っ　　！？」

銃を突きつけられた男は、その場でピシッと固まる。

「だ、誰だ……？」

「答える義務は無エなア……」

正体がばれないように、しかし無理の無い程度に声音を変えて答える行方。……完全に遊んでいる。

男は突きつけられているという事実から後ろを向けず、さらに冷や汗ダラダラ。

「じゃア、そろそろご退場願おうか」

行方はUSPのトリガーに指を掛けて

「なっ!? ちょ、ま、待ってくれっ!」

ついに振り向いた男 キンジ の額に向けて、トリガーを引ききった。

驚愕に染まるキンジの額に向けて、行方の持つUSPからパンツという軽い音とともに飛び出した弾丸 ゴム弾 が飛翔。直後に直撃。

「ぬアアアアアッ!!??」

「くくつ……。安心しろ、ゴムは柔<sup>やわ</sup>いやつだし、威力も低いやつだからなア。 プツ! あひゃひゃっ!」

行方は額を押さえて転げまわるキンジを見下ろして、または見下して、笑いをこらえながら説明したが……限界だったようだ。全力で笑い出した。

笑いで震える手で行方はUSPをホルスターに戻しつつ、運よく近くに跳ね返ってきていたゴム弾を回収した。無論爆笑しながら。

……ちなみに事情を知らない通行人も苦笑しつつ通り過ぎている。行方はキンジの精神でも崩壊させるつもりなのだろうか?

そして行方が撃ったゴム弾。威力は低いと言っているが、頭を狙っても脳震盪やら後遺症やらを起こさない“程度”だ。少なくとも十八禁エアガンの倍はある。

「ッ!ッ!」

「クハッ! ひやはははっ!」

「ちょっとバカキンジ！ なにやってるのよ！」

そんな状況で、行方曰くピンクツインテことアリアが介入してきた。

「行方も居るのね……。それにしてもキンジ、下っ手な尾行した後でなにしてんのよ？」

「う、あああっつ」

「やめとけピンクツインテ。どうせまだ反応できねエだろオからなア。プククッ」

「私の名前はピンクツインテじゃない！ アリアよ！」

「些細なことを気にしてンじゃねエよ」

「些細じゃない！」

「あ、アリア。あ、頭に響くから、さ、叫ぶなっ………！」

「私に命令するな！ キンジの癖に！」

「っ や、やめてくれ………」

「だ・か・ら！ 命令するなっ！」

「っ うあうあっ」

……これなんてカオス。

そして途中から会話に参加していない行方（元凶）は……

「 ふうつ……帰るか」

改めてひとしきり笑った後、踵を返して武貞高の寮へ戻る道を歩き出していた。

と、何か思いだしたようにアリアたちのほうを振り向き、

「オイ、ピンクツインテ。キンジ任せたア」

面倒ごとの処理を押し付けて、改めて歩き出した。

……その後のキンジの額には、なにやら痛々しいあとがくつきり残っていたらしい。前髪で隠れていたことが唯一の救い……か？



あの混沌があった週明け。

行方は何があったか（あのカオスが最終的にどうなったのかを含む）知るよしも無いが、一般科目の教室で行方とキンジの席に座っているはずのエリアは登校していなかった。だがキンジの額には、前髪で隠れてはいるがまだゴム弾の跡が……。

ちなみに行方はこの週末、装備科アムトの平賀文ひらがあやと車両科の武藤剛気むとうこうきのコンビに数ヶ月前から依頼していた“ブツ”を受け取った以外は、いつも通りならだらとした週末を送っていた。  
キンジに対する反省？ 行方がするわけがない。

二時限帯、行方は教室というか授業を抜けて屋上に居た。

この武貞高、わかるだろうがいろいろと適当だ。別に誰か居なくても教師は確認もそこそこに授業を始める。なにせ、任務で武貞高に居ない奴が居ることもよくあることだ。いちいち気にしてなんていない。その代わり実力主義だ。

屋上に出た行方は春の風にあたりながら、屋上のフェンスに寄りかかり缶コーヒーに口をつけていた。

空には飛行機雲が、空を両断するように走っている。徐々に後ろから霧散していく飛行機雲。

行方はそれをただボーツと眺めて

スツ、と行方の纏う雰囲気が突然鋭さを帯びた。

後ろから霧散していくはずの飛行機雲はその中ほどで両断され、そこから霧散が始まっていく。

だが行方の雰囲気が変わった理由はそれではない。確かにそれも原因の一つではあるが、それだけなら行方も「何だア？」とだけ思っ  
つて無視したはずだ。

本当の理由はただ一つ。その切れ目から降下してくる影、それは……人。

行方から確認できる上空の人影の特徴は、白または銀系統の長髪。それ以外の特徴は遠すぎてまだ視認できない。だが、長髪ということから女ということは予測できるだろう。

しかし不自然なことに、“何もせずに”降りてくる。正確には落ちてくると言ったほうが正しいかもしれない。しかも行方のほうに向かって落ちてくる。

「オイオイオイオイ、どこのバカだア？ イ・ウーか？ それともただのパラシュート無しスカイダイビングか？」

後者については何も言わないが前者の場合、それは“強襲”ということだ。しかも狙いは行方。

行方は制服内のUSPに手を掛け、構える。

そうこうしているうちにその人影は落下を続け、ある程度見えるようになってきた。

まず気を失っている様子は無い。が、明らかに武貞高めがけて落ちてくる。そして服は 臙脂色えんじいろが映える武貞高の女子制服。

「ハア？」

行方が素つ頓狂な声を上げるが、もう距離は100メートルと少し程度だ。もし何か通常のアイテムを使うなら遅すぎる。

あくまでも目の前で人がミンチになるのを見たくない行方は、能力の使用も考え始めた。

あと80…70…60…50……

そこまで来て、その女は体勢を入れ替える。横になっていた体を戻し、上下を普通に。

しかし落下中にそんなことをすればスカートは……

(黒かア……)

行方の思考が邪な方に飛んだその一瞬に、女は“背中から純白の翼を生やした”。

それと同時に急制動がかかり、屋上の上空10メートルほどで緩やかな落下に変化する。

そしてその特徴的な碧銀の髪と翼があいまってどこか幻想的な女性は、トツと軽い音とともに行方に背を向け着地して見せた。

臙脂色の制服を着たその女性　　というには行方と同年代に見えるので、少女のほうが正しいように思える。実際、どこか幼さが残る顔だ。

碧銀の腰まである長髪に、瞳はグレー。身長は行方と同年代の女子の平均と同程度。そしてスタイルは良いほうだろう。少なくとも顔は上の中は固い。

「よっ……と」

「オイ、そのバカ」

初見の少女に対してあんまりな態度であろうが、どうやって来たのか目にした行方にとっては仕方が無いことだ……そう信じたい。少女は？マークを頭上に浮かべながら振り向いた。

「へ？ 私？」

「オメエしか居ねエだろオが」

「あ、そうだね。　　って私はバカじゃないよ！」

「あんなアクロバティックな事を、予告も無しで見て見やがれ。そオすれば俺の気持ちも理解できるだろオから」

あんなものを見せられては普通、ストレスで寿命がマツハだ。

「つウかよオ、オマエ誰だ？ テメエみたいな奴、ココ《東京武貞高》じゃ見たことねエぞ？ その容姿じゃ、噂にならないこともおかしい」

「それは暗にカワイイって言うてくれるのかな？ ……でもバカの訂正はしてくれないんだ」

「別にごまかしてどうなるってんだ？ それと、バカが嫌だっつえんら、露出狂って呼んでやんよ」

「なんで露出狂！？」

「オマエ、さっき自分がやったこと覚えてねエってのかア？ 落下中に体勢を普通に戻したらどうなるか考えてみる。……ああ、黒は

背伸びじゃないの？」

「えっ？ あっ……」

かぁあつと赤くなる碧銀の少女。それがさらに画になるのが怖い。

「み、見た……んだよね……」

「ご馳走様ア」

「っ~~~~~！」

さらに少女は耳まで赤くなる。色白の肌ではそれが顕著だ。

少女はキツ！と行方を睨みつけて

突然、その背にある三対六枚の純白の翼を行方に叩き付けた。

- s e v e n t h (後書き)

ええ、まさかのオリキャラ介入です。

……どうしてこうなった!!??

そしてアリアの額に傷は無くてもキンジの額に跡が! (爆笑)

えー、とにかくすみませんm ( | | ) m

えらく時間が掛かってしまいました。

そして三人称、不評なら止めます。この話も書き直します。……ただしまたも時間が掛かりますがorz

受験生が何作も掛け持ちするもんじゃありませんね ( | | ) いまさらかよ

では、感想・アドバイス等よろしくお願ひしますm ( | | ) m

・ e i g o t t o (前書き)

内容が……どうしてこうなった……

まあ、よしよし。

ゴウツ！と確かな破壊力を秘めて振り下ろされた純白の翼。  
それはまず行方の後ろにあった行方よりも背の高いフェンスをひ  
しゃげさせ、行方の体もミンチに

変えることができなかった。

しなやかながらも高い強度を誇るであろう純白の翼は、髪が“白  
髪に変化した”行方に触れた途端に半ばから千切れ飛んだ。  
約半分になって千切れ飛んだ六枚の翼は真上に吹き飛ばされた後、  
校舎に向けて落下してきたところを行方がベクトル操作で操った風  
をぶつけ、落下の勢いを相殺。ポトツと屋上に落ちた。

「なんだよなんですかんなんですかア？ アホの子かと思えば、  
突然攻撃してくるなんてよオ」

「あ…あぁ……………」

「オマエ、イ・ウーか？ それともなんだ？ どっかに って  
どオした……………」

「うあぁっ……………！ ごめん、なさい……………ごめんなさいっ……………！」



碧銀の少女はその半ばから千切れた翼を消すと、手で顔を隠し、さらには尻もちをついて、震えた声で行方に謝罪し始めた。そしてそれは問い詰めようとしていた行方を戸惑わせるのにも十分な理由になった。

「もう嫌……嫌アアアアッ！！　　　　　　パパ、ママ……っ！！　あ  
あああッ！！」

少女の慟哭が、春の青空に響く。  
色々とマズイと思っただ行方が風を操って外に音が漏れないようにしていなければ、教師の誰か、または行方と同じようにサボっている生徒の誰かが来たことは間違いないだろう。

「オイ、だからどオしたってんだ」

行方は右手だけ能力を解除し、少女の肩に触れた。

「っ　！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！　嫌っ！  
嫌あ　　っ！」

触れられた少女は一瞬だけビクツと反応したが、また涙を零しながら震え始める。

（チツ、何が原因か知らねエが錯乱してやがる。マズいな……）

先ほどこの少女が使っていた翼、それは超能力の産物であることに間違いない。

そして超能力を持つ人物が錯乱・発狂することは、マズイどころ

の話ではない。そうなる前になんとしても抑える必要がある。

理由は単純。能力の暴走が危ぶまれるからだ。制御を失った能力は、その能力の種類にもよるが大体は破壊を撒き散らすなり被害を周囲に与える。しかも制御されていない能力は単調になるが、通常よりその破壊力を増す可能性もある。

例えばもしも行方が暴走して、能力をあたり構わず使い始めたらそれはもはや災害だ。まず止められない。

「パパ、ママ、助けてっ！ 嫌っ！

嫌ああああ

っ！！！！！！」

予想より早く、行方が危ぶんでいたことが、起きた。

碧銀の少女は座り込んだままのその背から純白の翼を再度出現させ、その翼はまたも行方に向かう。

「チッ！ 手遅れか！」

ただ純粹にその大きな質量をぶつける翼。しかしそれでは行方には届かない。

六枚の翼は行方に触れた途端、またも半ばから千切れ飛ぶ。行方ももう一度風を操り、落下の勢いを相殺して校舎への被害をゼロにそれを確認した行方が再度碧銀の少女に視線を向けると、千切れた翼はすでに再生していた。しかもその大きさを増して。

（クソッ！ 明らかに暴走してやがる……。ここでの戦闘はリスクがでかいか……）

行方に巨大化した翼が襲い掛かる。  
今度は当たる直前に翼が枝分かれしたようになり、行方だけでなく屋上の床にも突き刺さろうとした。

行方は一度舌打ちをし、その純白の翼に横から空気の塊をぶつけて、その矛先を横にそらす。

向きを強制的に変更された翼は横のフェンスを突き破ったが、今度はそこから行方に襲い掛かる。

が、フェンスを壊しながら横薙ぎに振られた翼は、行方に触れて千切れ飛んだ。

今回の翼は細い、先ほどの攻撃と比べるなら散弾だ。行方はその程度なら問題ないと踏んで、ベクトル操作により砲弾のような速度で碧銀の少女に接近。

錯乱中で状況把握のできない少女は、その接近を簡単に許す。

「　っ！」

碧銀の少女に近づいた行方は息を呑んだ。

行方が見た少女のグレーの瞳は空から降りてきた時の明るさを失い、なにか絶望したような、恐怖に駆られているような瞳に。

そしてその絶望と恐怖の対象は行方ではなく自身の翼に、能力に向けられていた。

(こりゃア……前に能力で事故でも起こしたことがあるのかア？  
そオでもなけりゃ、これの説明がつかねエ)

行方の一瞬の考察のうちに翼は再生。この至近距離で振るわれる。

「嫌っ！　来ないで！　来ないでっ！！」

だがそれでも行方には届かない。ただぶつけるだけの攻撃はその運動のベクトルを反射され、翼が千切れ飛ぶ。

しかし自分に被害が無いにもかかわらず、行方はボックスステップで碧銀の少女から離れた。

至近距離でも問答無用で振られた翼が、能力の主である少女さえも傷つけたからだ。

少女の右の頬と左の二の腕からは血が流れている。

頬はともかく腕はツイスト・ナノ・ケブラーTNK製の制服（防弾であると同時に防刃でもある）に守られていたにもかかわらず、その制服はあっさりと切り裂かれたのを行方は見た。

（こオなりや、ここでの戦闘は止めたほうがいい）

ということは、だ。もしもだれか武貞高の生徒がうっかりここに来てしまって、あの翼に当たったりすれば……スパッと切られてしまふということ。行方としても余計な被害は避けたい。

（どこか……被害の少ない場所は……）

翼に対応しながら行方は考える。

（……空き地島なら……よし、そオするか）

場所は決めた。次はどうやって目の前の少女を移動させるか。

（空気をぶつけても、あつちは飛べる。なら、俺が先に動けばついてくる……か？）

とりあえずはそれに賭けようと決めた行方は、風を操って小さな竜巻を生成。空き地島むけて屋上の床を蹴った。

一応、別に風を操作して少女の反対側からこちらに吹き飛ばすようにぶつける。

不意を突かれて行方のほうに向けて吹き飛んだ少女は再度行方を口ツクオンし、行方を追い始めた。

(よし。そのままついて来やがれ)

足の裏に空気を圧縮し、それを開放することで行方は再度加速する。

すぐにレインボーブリッジをはさんで学園島の向かいにある空き地島に着地した。そしてそれを追うように純白の翼を羽ばたかせた少女も空き地島に着地する。

「うあああああつ！ うああつ！！」

もう何度目ともわからない、翼が振られる。

行方はそれに手を向けて“受け止めた”。

もちろんベクトル操作で威力は相殺している。そして行方はその掴んだ翼を思いつき引つ張った。

当たり前のように、それにつられて碧銀の少女は行方に引き寄せられる。ぶつかりそうになった少女に対して、行方は 膝蹴りを叩き込む。

衝撃のベクトルを一点集中させたその蹴りで少女は数十メートル吹き飛んで、空き地島のふちギリギリで踏みとどまった。

見れば蹴りを入られた腹には局部的に翼と同じ素材のものが展開されていたが、それは粉々に砕け散っている。

(あの白いの、展開する箇所を選ばないのか……)

考えながらも、行方は碧銀の少女に接近する。  
長期戦になって彼女が損耗するのを待つより、短期決戦で沈めた  
ほうが彼女も周囲も被害は少なく済む。  
向かってくる翼を腕を振るだけで弾き飛ばしながら、行方は少女  
に近づいた。

「いい加減、落ち着きやがれエエ!!」

行方が撃った空気の砲弾は、白い翼が羽ばたいて起きた風圧で相  
殺される。

だが行方はその風圧を無視して、少女に腕がとどくところまで接  
近した。

「おらア!!」

そして少女の整った端正な顔を、露骨な傷が残らない程度に加減  
しつつも 殴り飛ばした。

「っ …!!」

少女が空き地島の地面に仰向けに転がる。行方が殴った右頬は赤  
くなっていたが、それだけだ。

行方は追加に大気の流れを操ると、彼女の上からそれを押し付け  
た。翼には少女の体にかけているものより強く押し付ける。

そうやって抵抗できなくなった後、行方は少女の下に近づいた。

「っ! はあっ、はあっ、はあっ……」

「……どオだ? 落ち着いたかア?」

「駄目っ！ 来ないで！ あの時みたいに、なっちゃうからっ！」

「あの時？」

「もう、あんなのは……嫌あああっ！！！」

押さえつけているはずの翼が、グググッと少し持ち上がる。まだ拘束できているが、開放されるのは時間の問題だろう。

「チッ！」

行方は翼を根元近くから蹴り飛ばす。それだけで純白の翼は根元から千切れ飛んでいく。それを左右一回ずつやって六枚全てを吹き飛ばしてから行方はもう一度話しかけた。

「あの時つてのがなんだかは知らねエ。でもよオ、今は落ち着け。わかったか？」

「うあ……あああああっ！！！」

少しは瞳に正気が戻っていたが、まだ暴走はとまらない。行方は翼が再生されるたびに全て吹き飛ばしていく。

「クソッ、精神が弱いのか……」

どうすれば暴走を止められるのか、行方は考える。

（能力を制御するのはあくまでもコイツだ。っても、精神が弱けりや能力の制御も難しいだろオな……。クソッ、精神を不安定に

してる原因がわかんねエと手のうちようがねエ)

行方の制服に入っていた携帯が着信を知らせる音楽を鳴らすが、行方の意識の内には無い。

どうすればこの暴走を収められるのかだけを考えて……

「ン？ 待てよ？ わざわざ原因なんて知らなくても、今だけ落ち着かせればいいってことだよなア……」

そうすれば、後は救護科アンビュラスに居る精神専門の奴にでも任せればいい。そう考えた行方はその方向に思考を変える。

なにかないか……と一瞬だけ顔を空に向けた行方だったが、そこには徐々に頂上を目指す太陽があるだけ。

「あー、クソツ……。ああもオっ!!」

痺れを切らした行方が、ようやく翼の再生速度がかなり遅くなつたのを確認して少女の傍で膝をつく。

「今は緊急だからな？ 我慢しやがれ」

そして掛けていた拘束を解くと  
を抱き寄せる感じで抱き締めた。

突然碧銀の少女を頭

抵抗なのか、途中までしか再生していない翼が行方に迫るが、少女の触れているところ以外の反射は健在なので全て弾かれる。暴走している翼も、さすがに主の体を買ってまで攻撃しようとはしない。



行方は少女を抱き締めた状態で、彼女の体内の様子を把握する。心拍数は暴走の影響で高く、脳内を走る微弱な電気も平均の平常時と比べておかしい。

脳内のほうを弄ることはできないので、負荷を掛けないように血流を操作して徐々に心拍数を落ち着かせていく。

それと平行して、親が子供をあやすようにポンポンと少女の頭を撫でてやる行方。

「……え？ 何を 駄目っ！ 離して！ あなたも殺しちゃう！」

「ハッ！ テメエ程度で俺を殺す？ 寝言は寝てから言いやがれ。……そこで寝ても構わねエからよ」

「駄目っ！ 前も、前もみんな死んじゃったの！ もうあんなの嫌！ だから私はっ……！」

碧銀の少女は涙を流しながら、行方の胸の中で呻く。

「そか。でもな……俺は死なねエ。オマエなんかのせいで死んでやる事はできねエ」

「……本当に？」

「あア……」

絶え間なく行方に攻撃していた翼の動きが止まった。

「なら……ずっと私の傍にいてくれる？ 私の居場所になってくれる……？」

碧銀の少女のお願い、というより必死の懇願。  
しかし

「やなごった」

「どっ、して……？」

少女の瞳が、また絶望したように光を失いかける。  
行動を停止したはずの翼も、蠢きだす。

「どオして俺がそんなことまで面倒みなきゃなんねェんだ？ それ  
にな

居場所なンぎ、自分で見つけてナンボなんだよ。他人に与えられたもので満足しようとするンじゃねェ。その制服着てるンなら、ここに転入なりしてくるってことなンだろ？ ここで見つけられない。居場所なンぎいくらでもあるンだ。自分の居場所くらい、掴み取りやがれ。

……まア、能力の制御をできるようにするるのが最優先だがな」  
少女の瞳に光が還ってくる。そこに宿る光は絶望から希望に。

行方はコロコロ変わる奴だなアと思っただが、口には出さなかった。それと同時に背中の翼も、周囲に散らばった翼の残骸も全て消える。

「　　あり、がとう。ありがとう……。私、ずっと、怖かったんだ。ずっと一人で、パパとママも、居なくなっちゃって……」

「……」

無意識のうち、行方は少し強く碧銀の少女を抱き締めた。

一人ということには、彼にも思うところがある。

「だから……私、ここで居場所を見つける。できたら、あなたの隣がいいけど……」

「ふん……んなこたア、能力の制御ができるようになってから言いやがれ。足手纏いは嫌いなんだ」

「ありがとう……」

碧銀の少女は、最後にそう言って気を失ってしまう。

「はアっ、ったく、柄にもねエことしちまったな……」

行方はそうぼやきながらも、自分の腕の中で気を失っている少女に向けてわずかな笑みを浮かべた。

- e i g h t h (後書き)

なんでこうなったんだろう……？

いや、キャラが勝手に動き出したって感じですよもつ。

まだ名前も出てないのに……ヒロイン入り決定しちゃったよ……未  
元物質っ娘。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますm | | m

3弾・first(前書き)

ようやくここまでたどり着いた。

では、さようなら。

### 3弾 - f i r s t

碧銀の少女を、某力エル顔の先生ではないが（そもそもが女性）冥土返しと呼ばれる人物の元に連れて行った行方が、帰ってから自室でやったことを思い出して悶えていたのは蛇足だ。

そんなことがあった後、着信していたことに気付いた行方が来ていたメールの内容を確かめっていると、行方の知らない番号から着信があった。

不審に思いながらも、行方は通話ボタンを押す。

「もしもし？」

『あ、えつと、遙行方さん……であってますか？』

「そオだが……オマエ、さっきの奴か？」

『はい。暴走を止めてくれて、ここに運んでくれたようで……本当  
にありがとございました』

「理由は知らねエが、超能力者の暴走なンざ放っておけるもんじゃねエンだよ。周りにどんな被害がでるかわかったもんじゃねエ。下手すれば死人が出る。そんなことは、オマエだつてよく知ってることだろオよ」

『っ ……そう、ですよ。ご迷惑をお掛けしました』

行方には電話の向こうでもお辞儀をしているあの少女の姿が想像できたが、そのまま消去した。

「別にいい。……そオいや、名前を聞いてなかったな？」

いまさらか。

『え……あ、そうでした。私の名前は『時音ときねアインス』っていいます。時音って呼んで下さい』

「？ ハーフなのか？」

『はい。母親のほぅが国外の出なので』

「ふうん。その髪の色はそっからか」

『そうです。お母さんも綺麗な髪の色で、私も気に入っているんですよ』

「……あア、そオかい」

行方は興味になさそうに……まあ、行方にとって気に入ってるどうのどうの話は事実興味が無いことだが。返事を返した。

「ンで？ いまさらだが、電話してきたってことはなんかあンのか？」

『それは、最初に言ったお礼を言うためです。改めて、本当にありがとございました。私はもう、前みたいなのはイヤなので……』

「暴走のときも前があったただか、殺したただが言ってやがったな？」

『最悪な過去です。……次に会った時にでもお話します』

「話してくれるってんなら聞いてやんよ。で？ 他に用件あんのか？」

『いえ、それだけです。先生にも今日はさっさと休めって言われてますし。一応、今日いっぱい休むだけで体のほうは問題ないらしいですけど』

体のほうは、というところでさっき、この時音という少女をあの医者のところ連れて行ったときに事情説明をしたら、いろいろ口うるさく言われたことを行方は思い出した。

女の顔は大事なんだから殴るなんてありえない。という言葉が皮切りに数分間はグチグチ言われたらう。もういっそ、途中で能力を使って声を反射しようかともおもったほどだ。

「そオかい。じゃあな」

『ええ。行方さん、明日学校で会いましょう』

返事も返さずに携帯を切って、二つ折り式のその携帯を閉じたところでまたもや着信を知らせるバイブレーションが、携帯とそれを掴んでいた行方の手を揺らす。

いまの時音のような内容ならともかく、日もどつぷり沈んだ後で用事を言い出すやつを、行方はアリア以外に知らない。

携帯の液晶を見ると、そこにはやはり『神崎・H・アリア』の文字が踊っていた。仕方なく通話ボタンを押す。



「なんの用だ、ピンクツインテ」

『よし、繋がった。                      アリアの携帯ですまない。 キンジだ』

いつものように、「誰がピンクツインテよ！」とか暴言が返ってくると思っていた行方は、その声の主に一瞬呆気に取られた。

「あん？                      なんでオマエが使ってた？」

『その説明はあとだ。手を貸してくれないか？』

が、キンジのその一言で脳内のスイッチを切り替える。

「なんかのミッションなのか？」

『そう言える。大まかに言えばこの間のバスジャック。あれは『武偵殺し』の犯行で、今回はその延長線にある』

「つまり、また『武偵殺し』が動いたってことが」

『理解が早くて助かる。それで今回の目標は                      ターゲット                      アリアだ』

「ほオ……。で、俺にどう手伝えと？」

『アリアは今、イギリスに帰る飛行機に乗ってるはずだ。ただ、まだ離陸には時間がある。でもあいにく今の俺にはアシがなくてな。俺を運んで欲しい。その後はついてきても来なくてもかまわない』

「わかった……。参加だ。オマエ、どオセ“アレ”を見かけたから、

俺に頼ったんだろ？」

『ああ。その通りだ。　　　時間が無い、急いでくれ。俺は台場のクラブ・エステーラに居る』

「場所はわかった。了解だ、“裏キンジ”」

行方はパチンツと携帯を折りたたんでまだ着ていた制服のポケットへ叩きこむと、机の上に置いてあった鍵をひったくるように取って部屋を出た。

行方が来たのは駐輪場　　　の隣にあるガレージ。

ここはバイクやチャリの整備・保管に使用可能な寮の設備で、中にあるのは大体がこの寮に住んでいる人間が使うバイクやスクーターの類だ。

その中に入った行方は、迷わずその一角を目指して歩く。

「さアーで、初陣だ。カツ飛ばすかなア」

たどり着いた先には、グレーの防水シートをかぶせられた大型バ

イク。見えるのはタイヤの下部だけで、ボディはシートに隠れていた。そのシートを行方は無造作に取り払う。

そして姿を現したのは、ところどころに黒のラインが入った白い塗装を施された大型バイク。

『アクセラレータ』　それが、このバイクの名だった。加速の名を冠されたマシンは、その名に恥じない性能を誇る。

これが、行方が装備科の平賀文と車両科の武藤剛気その他に依頼していたモノ。

元になったバイクの面影は、行方の見る限りほとんど残っていない。

このバイクはエンジン周りやブレーキなどはもとより、ライトにまで改造が施されている真正正銘のワンオフ。

最高時速は300をゆうに超えて、ボディは基本的に防弾素材製。ついでに二人乗りもできるようにしており、さらにボディの左右には、まだ空だが開くとP90程度のサブマシンガンと複数の弾倉程度なら収納可能なスペースまで設けられている。しかしその代償として本来あった収納スペースは無くなり、魔改造されたエンジンにもリミッター　それ有りで300オーバーだが　が掛けられた。そしてこれが、キンジの見た“アレ”と呼ばれるものでもあった。

行方は手早く特別製のライダースーツに着替え（といっても制服の上から着るのだが）、掛けてあったフルフェイスのヘルメットをつけてバイクに跨る。

イグニッションキーをクルリとまわすと、獣の咆哮のような爆音がガレージ内に反響した。

「さアて、行こうか」

ライトを点灯させ、スロットルを開放する。  
解き放たれた猛獣はテールランプの尾を引きながら、開けっ放しのガレージ入り口から飛び出していった。

少し遠出になるか？ という距離をものの数分で走破した行方と『アクセラレータ』はクラブ・エステーラに到着。そこでキンジを回収してから、羽田空港に向けて走り出していた。

「キンジ、間に合うのか？」

「ああ、大丈夫だ。これなら間に合う」

二人ともある程度声を張っていないければ、声が届かない。

「正面に直接乗りつける。そしたら、オマエはさっさと行け。わかったか？」

「わかった。ありがとう」

会話もそこそこに、明らかにスピード違反な速度で車の間を縫っ

て進んでいく。

この精密な機動は、行方の演算能力あってこそだ。進行先の状況を把握し、ある程度不確定要素の可能性も含めた中で、最短コースを走り抜けていく。

あとはフルフェイスのヘルメットで気付かれないことをいいことに、行方はちよこちよこ能力を小出しに使ってバイクを制御していた。

羽田空港の正面に乗り付けた二人はまずキンジが降りて走って中に入っていく、行方もバイクを停めてから第二ターミナルを目指して走る。

行方はキンジから教えてもらっていた便を目指し、武偵手帳の徽章を使ってチエツクインを通り抜け、今まさに閉じようとしていた扉に飛び込む。

後ろで扉が閉まったことを確認した行方の目の前には、キンジとフライトアテンダントの女性が向かい合っていた。

「オイキンジ、どうした？」

「ああ……もう離陸は止められないらしい」

すでにモードが解けている様子のキンジがそう言った直後、ぐらりと機体が揺れる。飛行機が滑走路を動き出した。行方の能力を使えば止められないことも無いが、それでは多くの人に影響がでるためその手は使えない。つまりは

「ここで、『武偵殺し』を止めるしかない」

「じゃア、やるしかねエンじゃねエのか？」

なア、アンタ。

神崎・H・アリアっていう奴の個室、知ってるか？」

「は、はいっ。いっ、ご案内します」

二人はフライトアテンダントの後をついていく。

そうして 武偵殺しの最終局面は開かれた。  
正史とは違う流れで動いていく物語。その物語は最初の山を迎えていく。

### 3弾 - f i r s t (後書き)

今回一番時間の掛かったところ あの娘の名前。

あーでもない、こーでもないってやってたら、ああなりました。  
垣根帝督を組みかえるなりなんなりしようかと思っただんですが、  
音に垣根的な音を持たせることしかできなかったという。

では、感想・アドバイス等待着てますm(´`´)m

- second (前書き)

話がなかなか進まない……

まあ、文字数を一回3000〜4000程度を目安にしているので  
当たり前かもしれませんが。

このくらいやって、大体ラノベ5ページを文字だけで埋め尽くすと  
同義ですし。(友達がラノベは1ページ文字だけで埋めると700  
と言っていた)

それでは、どうぞ。



行方とキンジはアテンダントの案内でアリアの部屋の前まで来ていた。

「こ、こちらになります」

「すまない」

「ここか……」

ガチャリとキンジがドアノブを回してドアを開ける。

「き、キンジと行方……!?!」

アリアは突然押しかけてきた二人を見て、目を見開いてソファから飛び上がった。

「『空飛ぶリゾート』ねエ……」

「さすが貴族様だ。このチケット、片道20万くらいするんだろ？」

『空飛ぶリゾート』とまで呼ばれるこの航空機は機内に座席ではなく高級ホテルのような個室を12個設け、その個室にはシャワーやベッドまで完備している全席スイートクラスの超豪華仕様の航空機。キンジの言っていたとおり、片道だけで何十万とかかるセレブ御用達。

「あ、アンタ達！ 何しにきたのよ！ っっていうか、突然人の部屋に押しかけるなんて失礼よ！」

「オメエにそれを言う資格はねエと思うんだがな？」

行方の横ではキンジも頭を縦に振っている。

アリアも自分がキンジの部屋に押しかけたのを思い出したのか、唸ってからもう一度ソファに腰掛けた。

「……で？ なんで来たのよ。行方まで一緒になって」

「太陽は何なんで昇る？ 月はなぜ輝く？」

「うるさい！ 答えないと風穴開けるわよ！」

「アン？」

行方は知らないが、いまキンジの言った台詞は過去にアリアの言った台詞。

アリアは台詞をキンジにまねされてカッとなったのか、スカートの裾に手を伸ばす。

キンジはアリアが帯銃していることに内心安堵しながら言葉を続けた。

「武偵憲章2条。依頼人との契約は絶対守れ」

「……？」

「つまりよオ、『武偵殺し』の事件はまだ解決してねエって事だ。

キンジと約束したんだろ？ キンジが強襲科アサルトに戻って最初に起きた事件と一緒に解決するってなア。それに、俺もお前からミッションに同行するよオに頼まれただろ？ …… 『武偵殺し』が解決されるまで、その契約は生きてるっつーことだよなア？」

「なによ……いまさら……」

沈黙が、この一室を包む。

この沈黙を打ち破ったのはアリアでもキンジでも、まさかの行方でもなく、

『お客様に、お詫び申し上げます。当機は台風による乱気流を迂回するため、到着が30分ほど遅れることが予測されます』

機内放送だった。

放送が流れたすぐ後から、この『空飛ぶリゾート』ANA600便は多少の揺れを伴いながらも飛行を続ける。

ガガン！ ガガン！！ と比較的近くにある雷雲から雷鳴が轟き、雷光が窓から機内へと入り込む。

「オイ、俺は機内の様子を見てくる」

行方は返事も聞かず、それだけを告げてアリアの個室から出て行った。

アリアはなんの様子を見るのか疑問に思ったが、雷のおかげでそれどころではなかった。雷に怯えていて。

通路に出た行方は壁にもたれながら携帯を開いた。  
表示される電波状況は圏外だったが、行方が少し弄ると電波状況を示すバーが立つ。

行方の携帯は、バッテリーの消費量が増える代わりに衛星を介した通話が可能になる改造が、行方自身の手で施されていた。

そして行方は着信履歴からコールを始める。

三回ほどコールが繰り返されたところで、相手が出た。

「悪いな。ちょっといいか？」

「あ、行方さん！　どうかしたんですか？」

その相手は時音・アインス。

「こちらら、事件に絶賛首突っ込み中だよ。……オマエ、いまから動けるか？」

「え、えっと……体は問題ないですから、病院（い）を抜け出せれば」

「ふうん……じゃあ、お前の能力の詳細って自分でわかってるか？」

「あ、はい。そのくらいなら」

「どんな能力だ？ さつきは翼を生み出してたんだが」

「あ、あの、なにかいま行方さんの関わってることと関係があるんですか？」

「もしもの保険。これで良いか？」

「まあ、別に構わないんですけど……」

そして時音はよく事情が理解できないまま、自分の能力について喋りだした。

「まず、私の能力は『ダークマター未元物質』っていう能力なんです」

「ダークマター？ あの存在するのかすらわかってねエ暗黒物質ってヤツか？」

「いえ、それとは違います。名称の漢字から違いますし。未知の『み未』と元通りの『もと元』に『ぶつ物質』って書いてダークマターって読むので」

「それで『ダークマター未元物質』？」

「はい。『まだ見つかっていない』。理論上は存在するはず』という『物理学で定義されるダークマター』とは異なって、本当にこの世界には本来存在しない物質、元をたどれば『それ（この世に存在しない物質）を構築する素粒子を生み出す』という能力です。ですから『未元物質』で生み出された物はこの世界の法則に従いません。変わった物質を生み出すだけではなく、『この世の物理法則を塗り替える能力』。相互作用した物質が本来の物理法則とは違う法

則で動き出す。それが『未元物質』という能力です。たとえばこの間の翼。あれに触れた太陽光を、『太陽光という扱いのままその性質を変えたり』できるということです。……まあ、法則の改変については『この世に存在しないもの』が混ざった結果による副次効果なんですけど」

サラリと、とんでもないことを言っただけの時音。

つまりこの能力を扱う時音という人物は、物理法則という確立されたルールさえ捻じ曲げることができるということ。

そんな能力の詳細を聞いた行方の背筋を冷たいものが通る。

その素粒子自体はベクトル変換で弾けるだろうが、それによって引き起こされる物理法則を無視した攻撃なんていうものは……考えただけでゾツとする。

「オマエも大層な能力持ってやがるなア」

だが、いくら法則を捻じ曲げても刷新できるわけではない。

しかも副次効果と言った。それではその方向性を決めることはできず、『思いのままに法則を作る』ことはできないだろう。

それができれば ソイツは神だろう。行方はそう思った。

世界の法則ルールを作れるのは自分達ではなくて神。法則ルールを作るなんてことは神々の領域。

しかし、この『未元物質』には二つ名のようなものがあつた。

『このことは違う世界における無機』

行方も時音も知らないことだ。

だがこの通りであるなら、この滅茶苦茶な能力も理解できる。

この世界のルールは、あくまでもこの世界のルール。幾多ものゲームそれぞれに違ったルールがあるように、違う世界では適用されない法則<sup>ルール</sup>。

ならばその世界に存在する無機が、この世界の法則に縛られないことはむしろ必然。

時音の『未元物質』という能力はそれを好きなように引きずり出す能力であり、たとえるなら一つのゲームに他のゲームのルールを入れるようなもの。

双六すごろくのようなボードゲームにアクションゲームのルールを。トランプならババ抜きにポーカールールやダウトのルールを押し込むようなものだ。

そんなことをすれば、元のルールは塗り替えられる。

そしてこの塗り替えが『未元物質』による『法則の改変』。

しかし二つの別のゲームのルールが相成れないと誰が決めた？

確かにルールは変わってしまうだろうが、そこは双方のルールが混ざり合っているだけ。両方のルールが適応されるゲーム。

それが、『未元物質』の混ざった世界。

だからこの世界の法則を無視する物質で作られた純白の翼にも、

この世界の法則であるベクトルというものは反映される。

その代わり、『重力を無視した飛行』、『太陽光を太陽光のまま、その性質を変換できるようにする』などの法則も追加される。

そしてその法則追加を可能とするのが『未元物質』。

「なら、『未元物質』にぶつかったモンの衝撃を吸収。さらにその運動ベクトルをゼロにするって真似はできるのか？」

「いけません。とっさに……というのは無理でしょうけど、準備ができるのならその物体の質量もなにも関係ありません。“そういうものを生み出せばいいんですから”」

「ハッ、未恐ろしいなオマエは」

もしも暴走していたとき、その能力の全てを発揮していたなら……恐らく武貞高が島ごと沈んでいただろう。

それほどのレベルの能力なのだ。

圧倒的な力を持つ行方の『ベクトル操作』に並ぶ能力。

それは同時に、行方の持つ『ベクトル操作』という能力の恐ろしさも物語っていた。

「そんじゃ、もし力借りるときにはまた連絡する」

「あ、はい。わかりました」

通話の終わると同時に行方は時音の番号を登録し、携帯を閉じた。衛星を介するモードのままにしておいてもバッテリーは後数時間は持つ。

そして行方が携帯をポケットへ突っ込もうとして

パン！ パアン！

武貞高の生徒として最も聞きなれているであろう、銃声が機内に鳴り響いた。



- second (後書き)

なんというか、未元物質についての独自解釈……そこまで間違っていないですよ？ 自信が無いんです。

……もし間違っけていてもこのままで行きますが(苦笑)

というか、今回はそれのおかげでストーリーがほとんど進まなかったです。はい。

では、感想・アドバイス等お願いしますm( ) ( ) m

・ t t i r r a (前書き)

三 (一) 一 週間にわたる。

では、早速書いてみる。

(チツ、早速動き出しやがったか)

行方は音のした方へと駆け出す。

と言っても狭い機内、すぐに音の発信源であるコクピット前に到着した。

見ればコクピットへ続く扉は開け放たれ、部屋の外にいたアテナントと少ない乗客がパニックに陥っている。

他の乗客も、何事か……と部屋から出ようとしていた。

「部屋から出るんじゃない！」

「な、なんだね君は！」

少し恰幅の良い男性が、怒鳴り気味に行方に声をかける。

「武偵だ。制服でわかなだろ」

「じ、じゃあ、事件なのか!？」

「さアな。まだわかんねエよ。だから出てくんじゃねエ。……最悪死ぬぞ」

「なっ!?! ……わ、わかった、従おう」

そう告げて、その男性は足早に自分の個室へ戻っていく。そして

その話を聞いていたほかの乗客もさっさと部屋に閉じこもった。直後、焦った顔のアテンダントが数名行方に詰め寄る。

「あ、あの！ わ、私達は！」

「ふん……確か、アテンダント用の待機室つてのがあったな？」

「は、はい！」

「そこに行け。もしもまた銃声がなるようなことがあれば伏せる。後は自分達で判断すればいい。あんたらもプロだろオが」

「わ、わ、わかりました！」

リーダーらしき一人のアテンダントが、数人を連れて奥のほうへ引っ込む。

（まア、なんだかンだ言つて所詮は一般人。犯人が複数居たとして、取り押さえるなんてこたアしねエだろうな）

それにむしろ、余計なことをされないほうが行方達にとっては都合がいい。人質を取られでもすれば動けなくなる。

「おい、行方！」

そんな考えを巡らせていた行方の後ろから、キンジが声をかけた。

「キンジか……アリアはどオした」

「まだ部屋に居る。鍵は掛けるように言ったけど……」

「馬鹿かテメエ。今回狙われてるのはアリアだ。そいつを一人にするなんてどういうつもりだ？」

「い、いや、それはわかってる。でも状況を確認しないと」

「それなら、俺に電話でもすんのが最善だったな。……まあ、幸い犯人は目の前に居るアイツだけみてエだが」

行方が視線を向けた先には、この旅客機に乗り込んだ二人を迎えたアテンダント。

その小柄な女が、昏倒している機長と副操縦士の二人をズルズルとコクピットから引きずり出して、どさどさつと投げ捨てた。

「さアて 事情聴取の時間にも突入すつか？」

ホルスターから引き抜いたUSPをアテンダントに向ける行方。それに続いて、キンジもベレッタを構えた。

「動くな！」

「……くふっ」

二人を確認したアテンダントの女は、にいつ、と特徴の特に無いことが特徴とでもいいたげな顔に笑みを貼り付ける。

そして一つウィンクすると、ピンと音を立てて胸元から缶のようなものを取り出した。

「くふふっ、Attention Please」お気を付け下さい  
《・でやがります》

操縦席に引き返ししながら缶を放り投げる女。

カランカランと乾いた音を立てて行方の足元に落ちた缶から、シユウウウ……と音を立ててガスが噴き出す。

「なっ ……!?」

「キンジ、行方 ……っ!」

部屋から出てきたアリアが、その様子を見て悲鳴を上げる。

「戻れ!」

戸惑うキンジを部屋のほうへ突き飛ばしながら、行方も一緒にアリアへ引っ込んだ。

その直後機体がガクンと揺れて、バチンと機内の電気が非常灯に切り替わり、乗客の悲鳴が機内に響き渡る。

「二人とも! 大丈夫なの!?!」

「ああ、問題ねエ」

「俺もだ。体に影響は無い……」

キンジは手を握って開いてを繰り返して体の調子を確認し、行方はUSPをホルスターに戻しながら返答する。

事実あのガスは無害なものであり、あの女が自分の姿をくらますために使ったものだ。有害なものであれば、閉鎖空間である機内で自分も身動きできなくなってしまう。犯人が武偵殺し以上、それはありえないことだった。

「クソッ、一本取られた。アリア、あのフザケた喋り方……アイツが『武偵殺し』だ。“やっぱり”出やがった」

「ハン、くつだらねエ脅し使いやがって。次はちよつと痛い目に合わせねエといけないかもしれねエなア……」

「やっぱり……って、あんた達『武偵殺し』が出るって最初からわかって」

アリアは赤紫色カメリアの瞳を見開いてキンジを見る。

「出るってわかってなけりや、俺はここにいなエよ。あくまで俺は『武偵殺し』を解決するミッションの協力者。テメエらのプライベートに介入する気なンさらさらねエンだ」

行方はその後「ベッド借りるぞ」とだけ告げると自分の腕を頭の後ろで組み、足も組んでベッドに寝転ぶ。

アリアは何か言いたげに口を開こうとしたが、キンジが何かを言おうとしているのに気付いてその口を閉じた。

キンジ曰く、『武偵殺し』はバイクジャック、カージャック、シージャックと事件を続け、最後は直接対決で一人の武偵を仕留めた。だがシージャックの際、アリアは『武偵殺し』が毎回発する電波を傍受していない。

それは『武偵殺し』が電波を発信していなかったからであり、理由は爆弾を仕掛けたりする場合のように船を遠隔操作する必要性が無かったから。

つまり自分自身カウイングがその場に居た。

そしてここで、バイク、自動車、船と大きくなっていった事件の

対象の乗り物がキンジの自転車へと小さくなり、その次にはバスジヤックへ。そして

「……………」

「分かるかアリア。コイツは初めっからメッセージだったんだよ。お前は最初から、『武偵殺し』の手のひらの上で踊ってたんだ。ヤツはかなえさんに罪を着せ、お前に宣戦布告した。そして兄、いや、シージャックで殺られた武偵を仕留めたのと同じこの三件目でお前と直接対決しようとしてる。この、“ハイジャック”で」

アリアが悔しさで、ギリツ…………と歯を食いしばる。

なんと言われようとアリアは“H家”の人間。推理で負けたことが悔しいのだろう。

ポポーンポポポン。ポポーン。ポポーンポポーンポポーン…………

不意に、離着陸の際に使用されるベルト着用サインが、注意音と共に意味の分からない、だが明らかに規則性のある点滅を始める。

「和文モールスだ。キンジ、読んでみる」

目を閉じ、寝ているように見えた行方だが話は全て聞いていたようで、これにいち早く反応した。

自分でもすでに解読はしているのだが、あえてキンジに振る。

「あ、ああ……………」

そしてキンジは行方に言われたとおり、和文モールスの解読を始めた。



オイデ オイデ イ・ウー ハ テンゴク ダヨ  
オイデ オイデ ワタシ ハイツカイ ノ バー ニ イルヨ

「……誘ってやがる」

「上等よ。風穴あけてやるわ」

アリアは眉を吊り上げると、スカートの中から左右それぞれ黒と銀のガバメントを取り出した。

行方もベッドから起き上がり、首に片手を当ててコキコキと鳴らす。

「さアて、さっきの仕返しにでも行くか」

「俺も一緒に行ってやる。“今の”俺がどこまで役に立つか、分からないけどな」

「来なくていい」

ガガン！ と聞こえた雷鳴に、アリアは身を縮こまらせた。

「どっするっ？」

「……く、来れば？」

「ハッ、体だけじゃなくて精神も子供ってか？」

「うっ、うるさい！ 黙らないと風穴ー！」

「できるならやってみるんだな」

「ぐうっ……」

行方に実力で敵わないことを身をもって体験したアリアは、何も言えずに黙りこくる。

「行方、お前また面倒なことするなよ……」

「知らねエな。……行くぞ」

どこか緩い空気の中、まず行方がスイートルームを出てそれに二人が続く。

そして三人は一階にあるバーへと足を進めた。

三人の目標はただ一人、『武偵殺し』。その彼女からの誘いに乗って、三人は進む。

- t h i r d (後書き)

たぶんこれの解決まで後2話くらいと推測してます。

一巻が終わるとなると、4〜5話ほどで。

一巻の内容が終わり次第、一人称の途中までを三人称に改稿していく作業に入るので、二巻の内容に入るのは少し遅くなります。ご了承を。

ガスのところで二人だけ部屋に追い返して行方は能力使わせようかどうか悩んだ今回。

（でも使ったとしてどうするんだ？ 武偵殺しをここで止めちゃう？ ……なにそれつまんね。キンジとアリアどうすんだよ）

という脳内会議により没。

流石の武偵殺しでも能力使用モードの行方には絶対に勝てないので。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますm( )m

・ fourth (前書き)

大体、三週間くらい放置してしまってますみません。

では、ごんご

行方たちがバーに着くと、そこには一組の男女がイスに座ってカクテルを飲んでいた。

複数犯だったのか……とおもいつつ、三人は足を止める。

片方はさっきのアテンダント……だが、その服装が変わっていた。アテンダントの制服から“武貞高の制服”へと。それも、ヒラヒラとしたフリルだらけの改造制服。

もう一人の男は高級たかそうな黒いスーツを着ていて、その上から場違いな白衣を羽織っていた。

アテンダントのほうになにか気に掛かることがあるのか、キンジは顔を顰める。

「くふっ、今回も綺麗にひっかかってくれやがりましたねえ」

アテンダントの女が行方たちのほうを向きながら、ベリベリと薄い膜の特殊メイクを顔から剥がす。そしてあらわになる素顔は

「理子!？」

「Bon こんばんわsoir」

反応したキンジにウィンクを返す理子。

その後で、スーツの上から白衣を纏った男も行方たちのほうを向いた。

年齢はまだ30にすら届いていないだろう容姿に、人目を引く肩

までの銀髪。

「お二人ははじめましてか。行方は久しぶりだ」

「やっぱりテメエかよ、三下アア！！」

礼儀正しく一礼する男に対して突然、体から滲み出るほどの怒気を開放する行方。

そのままUSPをホルスターから抜き、白衣の男に向けて撃つ。

「が、キイーン！ と軽い音を立てて、その弾丸は“一刀両断”された。」

男の手にはどこから取り出したのか、刃渡り60センチほどの両刃の刀剣が握られていた。これまた白衣に似合わないが、当人はさして気にした様子も無い。

「血の気が多いのは、感心しないな。冷静に行動できなくなる」

「んなこたアどオでもいいんだよ……テメエを殺させやがれエエエ！！」

他の三人を置いてきぼりにしたまま、行方はアサルトナイフを左手で逆手に持ちながら、白衣の男に突進する。

狭い飛行機の中、その間は一瞬でゼロに。

ガギイイ！ と、行方が逆手に持ったナイフを振り上げ、それを男が刀剣で受け止めた。

アリアとキンジは固まり、理子は予想通りといった笑みを浮かべている。

「いい加減死にやがれ、アレイスターアアア!!」

「ふっ……!!」

拳銃を超至近距離で『アレイスター』と呼んだ男に向ける行方。アレイスターと呼ばれた男は刀剣でアサルトナイフを弾きながら、その拳銃の銃身を切り裂いてみせた。

「コンのっ!!」

バックステップで距離を取った行方は、使えなくなった拳銃をアレイスターの顔面向けて投げる。

アレイスターは首をかしげるだけでそれをかわすが、その間に行方は右腕の袖から隠しナイフを引き出していた。

「おオオオ!!」

「感情的過ぎる。もっと冷静に、効率的に動け」

アサルトナイフを刀剣で受け止め、隠しナイフの突きを腕自体を弾くことで切っ先を逸らす。

アレイスターは簡単にやってのけているが、行方も相当な実力の持ち主。ナイフを振るう速度も半端ではない。が、アレイスターには届かない。

そして行方はまだ能力を行使していない。なぜなら、この狭い飛行機の中で行方の力は大きすぎるから。

物を吹き飛ばせば内壁にダメージが入るし、反射を使った爆発的加速もその反動で床にダメージを与えてしまう。単純に言って、行方の能力はこういう閉鎖空間で使うには不向きだ。

それに飛行機なら尚更。機体に亀裂が入ればそこから機体の崩壊

が始まっていく。

「いっつも澄ました顔しやがって……いちいち癩かんに障さわるンだよオ！」

「ふむ、それは君の感性だ。私には関係ない」

バキィッ！ とアサルトナイフが刀剣とぶつかってへし折られる。どうやらアレイスターの持つ両刃の剣は、高い強度を誇っているらしい。

行方はまたもアレイスターに向けて使えなくなったアサルトナイフを投げる。

「時間稼ぎのつもりなら止めたほうがいい」

ガキッ！ アレイスターが、両刃剣を自身に迫っていたアサルトナイフの柄ごと振りぬいた。

刀身が消えるような速度で放たれた一振りは“衝撃波を飛ばす”。行方に向かう衝撃波。銃があれば衝撃の相殺ができたであろうが、すでに壊されている。それに行方が避ければ衝撃波は旅客機の機体にダメージを与えることだろう。

「チッ！」

手に詰まった行方の髪が白に染まり、能力が発動される。

衝撃波は行方に触れた瞬間、衝撃波はほぼ無害なレベルまで分散されて周囲に撒き散らされた。

「やってくれるじゃねエかよ、アレイスター」



「能力を発動したのか。しかし君も私の力……いや、この剣の力を忘れたわけではあるまい？」

「『幻想殺し《イメージブレイカー》』……」

忌ま忌ましそうに、両刃剣の名前をつぶやく。

『幻想殺し』 その剣に触れた全ての異能・超能力を打ち消す、超能力者殺しの剣。

「そうだ。それは君の力も例外ではない。それは身をもって知っているだろう」

「何度目か覚えてねエけど、やってやんよ。それが俺を刺すのが先か、俺がオマエ自身に触れるのが先か」

「いままで私が触れられたことなど無いがね」

「俺も刺された事なンぞねエよ」

行方の怒気は、落ち着いた、しかし濃密な殺気を取って変わった。隠しナイフを出した両腕をだらりと下げて、真紅の瞳がアレイスターを射抜く。

「しかし、まだ決着をつけるには早いようだ」

「あん？」

周囲を見回したアレイスターの発言に行方も周囲の状況を把握する。いままでアレイスターしか無かった彼の瞳に、少し離れたバーの入り口付近で側頭部から血を流したアリアの姿が見えた。

「どうやら、こちらの戦闘の余波に巻き込まれぬように離れたらしい。」

「あれがどうしたってんだ？ 関係ねエだろオが」

「ククツ、君も薄情な男だ」

「残念だがよオ、いまの俺はテメエを殺したい気持ちで一杯一杯なんだ。自分の弱さで怪我した奴のことなンざ知らねエなア」

「まあ、私の仕事は終わった。これ以上君の相手をする必要もなくなったのでね」

「あゝ？」

「私の今回の仕事は、君の足止めだ。リュパン四世がH四世……もといホームズ四世との決着を着けるためのな。どうやら今回の決着はついたようだ」

アリアがキンジにつれられてバーから出て行く。

確かに側頭部を切られたアリアとほぼ無傷の理子。いまだちらが勝っているのかは一目瞭然だ。

「逃がすと思つてンのか？」

「君は私を追えないだろう？」

かすかな微笑さえ浮かべるアレイスターと、それを睨みつける行方。

「また会える日を楽しみにしている」

「どうかでくれたばってくれたほうが、俺は嬉しいんだけどよオ」

「ククツ、ではな」

幻想殺しを鞘に収め、アレイスターはその場から突如として消える。

行方はそれまで動かなかった。どちらにせよ、行方の攻撃が届く前にアレイスターはその姿を消していただろう。

「クソツタレが……次こそ殺す……」

髪の色を元に戻し能力を解除した行方は、アレイスターがいた場所を睨みつけながら、その瞳に憤怒の炎を燃やしていた。

- f o u r t h (後書き)

まさかのアレイスター (笑)

しかも幻想殺し (爆笑)

ちなみにこの作品のアレイスターさんは強いです。肉弾戦が。

なんというか、遅れた原因の一つがこれですね。アレイスター。

理子一人じゃ対処できなかったですし、それならどうするかって投入を決めたんですが。

……ファミリーネームどうしましょう。まあ、クロウリーは使いません。というか、アイデアをください (切実)

ちなみにアレイスターさん、今後もチョコチョコと出てくるキーキヤラ的な立ち居地にいます。これ以上は言ったら駄目ですよ (苦笑)

それと幻想殺しの鞘には、その能力を抑える力があります。なので、アレイスターはあの場から消えれました。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いします m ( ) ( ) m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9338r/>

---

緋弾のアリア 白の武偵

2011年10月17日02時59分発行